

別紙2/3

97

陸軍省

十一月二日接受

陸軍省 満蒙密電第二〇二七號

昭和三年十二月下

陸軍大臣 寺内正毅



外務省 閣下 閣下 閣下

口より談話を由り債物輸出禁止ノ件ニ
関し内閣府及ノ東電及四電ヲモリテ
極急ニ外務省ニ通知スルニ趣キ
存スルニ付也

陸軍省

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or official document, written vertically.

Handwritten text in a cursive script, likely a signature or name, written vertically.

Handwritten text in a cursive script, likely a name or title, written vertically.

總軍大田寺内

Handwritten text in a cursive script, likely a name or title, written vertically.

Handwritten text in a cursive script, likely a name or title, written vertically.

Handwritten text in a cursive script, likely a name or title, written vertically.

Handwritten text in a cursive script, likely a name or title, written vertically.

Handwritten text in a cursive script, likely a name or title, written vertically.

Handwritten text in a cursive script, likely a name or title, written vertically.

Handwritten text in a cursive script, likely a name or title, written vertically.

Handwritten text in a cursive script, likely a name or title, written vertically.

Handwritten text in a cursive script, likely a name or title, written vertically.

Handwritten text in a cursive script, likely a name or title, written vertically.

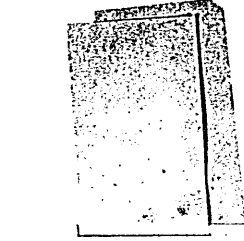
78

本庄
 以下
 99
 生

綿、穀、近來、賣、管、口、ヨリ、新、民、七、方、
 西、輸、出、セ、リ、
 同地結
 氷、以、概、却、迫、シ、將、未、輸、入、ノ、途、
 我、軍、隊、ノ、需、用、上、致、シ、テ、未、タ、
 運、來、本、為、メ、マ、リ、ト、云、フ
 之、レ、シ、防、過、セ、ン、ガ

牛莊港在留日本人ノ状況
 一三二一四

本年七月牛莊占領以來本邦人ノ當港ニ
 渡來居留スルモノ日ヲ逐テ増加シ現ニ
 當館ニ届出ラタレモノ已ニ八百九十一名ノ
 多キニ達シ之ヲ前戰前在留セシ百名ノ
 内外ノ本邦人ニ比スレハ殆コト八九倍ノ
 増加ナリトス此等本邦人ハ何レモ神戸
 及門司長崎等ヨリ便船アル毎ニ渡
 來スルモノニシテ每船多キハ百名少キ
 ハ三四十名ノ割合シ以テ増加セリ即チ
 本日(十一月十八日)入港ノイニデブレント



居レリ然ルニ其新渡航者ノ内能ク其目的ヲ達シ相當ノ業務ニ從事セル者亦少カラスト至モ着港後空シク手ツ末ネテ無為ニ日ヲ送り居ルモノ亦甚タ多キカ故ニ今後渡航者ノ増加ト共ニ其生計ノ道ヲ得ルヲ愈々困難ナルハキシ恐ル、ナリ現在當港ニ在番スル本邦人中其職業ノ重ナルモノヲ掲シハ左ノ如シ

- 銀行 一
- 貿易業 五
- 船舶取扱業 三
- 雜貸商 五〇
- 旅店 一三
- 菓子屋 一八
- 飲食店 一九

此他酒煙草類ヲ販賣スルモノアリ理髮師アリ洗濯屋アリ湯屋アリ眞師アリ古着屋アリテ市街ノ一隅ニハ恰モ我殖民地ノ如キ場処アリテ其附近ニハ教多ノ本邦人雜居セリ是ハ即チ在番人ノ増加ニ伴ヒテ自ラ在番人間ニ必要ナル營業ノ起リタルト當時ニ當地并ニ當記附近ニ駐在セル軍人軍族ノ需要ニ應スヘキ營業ノ起リタル爲メニアラサレハナシ今後若シ軍政署ニ於テ婦女子渡航ノ取締ヲ寛大ニスレトキハ當地在番人ノ數ハ一層増加スヘキモノト信スルナリ

五十年日本領事館

右及報告候教具

明治三十七年十一月十八日

在牛莊

領事 瀨川 淺之進



外務大臣男爵小村壽太郎殿

二宮 光 殿

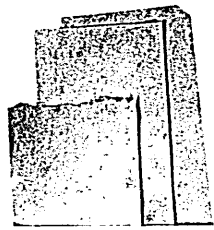
拝啓陳者別紙ハ信支書記官力此程軍政
実況取調力命令依り管口出張致し帰任
ノ後口地駐在ノ帝國領事ト軍政官ト職
務上ノ実係ニ関シ心覺迄同官ノ相認メ共
意見ニ有リテ以テ高年ニ資シ度迄ニ供養見
共ノ教具

明治三十七年十一月廿九日

遠東守備軍司令部附

公使館ニ書シテ官川上俊彦

外務大臣男爵小村壽太郎殿



100 031

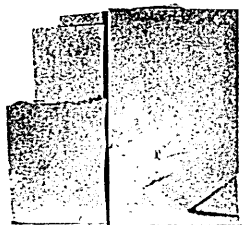
外務省

[Large empty rectangular box, likely a placeholder for a signature or official seal.]

管口ニ駐在スル帝必領事ト軍政官
 ト職務上ノ関係ニ非スル意見
 今回中官ノ親シク管口ニ到リテ目撃セシ
 所ニ據テハ口地ニ於テ人希必領事ト軍政官
 ト職務上ノ関係ハ現下殆ク曖昧ニ失シ
 居ルノ憾アリ随テ假リニテ態ノ多少言大
 夫ニテ發生スルカキ場合ヲ想定スルハ職權
 ノ範圍の外ヲ缺ケルコト今日ノ如クナル於テ
 ハ当該事件ハ其ノ帰依ヲ所ニ惑ヒ延テ
 行政ノ不統一ヲ招クノ恐シアルモノニ似テ
 裁判ヲ務メ取扱方ニ於テ然リトス
 裁判ヲ務メ取扱方ニ於テ然リトス

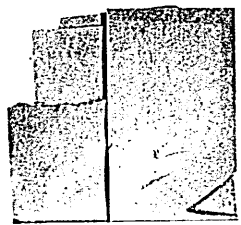
5-0392

02 16



小軍政官之ヲ取扱ヒ外由人ノ被告タ
 場合ハ各所属領事之ヲ裁判シ而シテ帝
 國臣民ノ被告タハ場合及帝由臣民ノ犯
 罪ノ件ハ條約ヲ據リテテ帝由領事
 之ヲ取扱ヒ居ルニ軍政官ハ別ニ軍事上
 必要アリト認メテ領事ノ取扱ヒ範圍内ニ臨
 入りテ任意ニ之ヲ判断スルノ權ヲ有シ
 居ルナリ 悟ヲ詳ニシテ之ヲ云ハハ領事
 甲ナルハ邦人ノ犯罪者ヲ日本ノ法令ヲ據
 リ要對スルト曰暗ニ他ノ一方ニ於テハ軍政
 官ハ乙ナルハ邦人ノ犯罪者ニ對シテ任意ニ之
 ニ要對ヲカケ領事ハ軍政官ノ此ノ要對ヲ
 以テ軍事上ノ必要ニ基ケンモノナラント為シテ

黙認シ居ルニ便ニ詳言スルハ邦人ノ犯罪
 者ヲ要對スルモノ今日概シテ軍政官ニ
 テ領事ハ唯軍政官ヲ特ニサリ以テ受
 ケ要對方ヲ求メラトスルハ邦人ノニ對シ日本
 ノ法令ニ據リテ之ヲ處罰シ其ノ餘ノ邦人
 人ノ犯罪者ニ對シテハ軍政官カ如何ニ之
 ヲ處分シ居ルカ表面ニ於テ知リ居ラザルニ
 及ビ軍政官ハ今日邦人ノ往來居留
 ハ中邦人ノ往來居留及營業ノ自由ニ條約
 上ニ據リテカ故ニ若シ此制限ヲカスルニ
 西國ノ憲法ニ於テハ之ニ對シ當然ノ保障ヲ容
 ルニキナシ軍政官ノ場合ニ於テハ是ニ本等

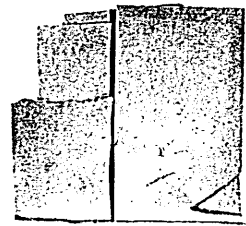


一、軍政官ノ必要ニ基キテ其ノナラントシテ
 修ニシテ居ルナリ居ル局ノ以テハ中野人取
 備ノ点ヲ軍政官ノ先ノ之ヲ軍政署ニ
 差出サシメ軍政官カ居ル所ノ奥印ヲ
 捺セムルノノ戸籍ノ点ヲ之レヲ再々領
 事ニ差出サシメ故ニ領事館ノ警察官吏
 一、行政警察ノ一部ヲ委任スルニ止リ
 司法警察ノ勿論行政警察ノ大部分ハ
 概シテ軍政署ノ司掌スル所ナリ在留禁止
 ノ如キ行政委任ニ於テハ曾テ其ノ請求ヲ軍
 政官ヲ受ケタルニ際ニ領事ハ果シテ安寧
 妨害ノ虞アリテ清國ニ在留居民ノ取締
 法ノ條文ニ據リテ委任セシメ度際セシキニ對シ

外務省
 文書
 第...
 第...

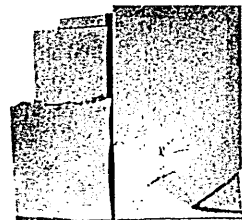
軍政官ハ別ニ任意ノ方法ニ依リ之ヲ受取
 放逐シタル一事例アリ要之ニ領事カ條
 約及法律ニ據リテ有テ權能ハ軍政官ノ上ニ必要
 下ノノ軍政官ノ出入ル所ニ任シ其ノ權
 限ハ範圍不向ノ旨ニ打過キ居ルニ今日ノ狀態
 ナリトス
 有テ國々清國ノ領土内ニ在リ我々領軍
 務官當テ事該領地域内ニ領事裁判
 權ヲ有テ我領事カ各其職務ヲ行ハシ
 一、聯行ニ在リテ領事ノ條約上及法律
 上ノ權能ハ該軍務官ニ許容スルニ範
 圍ノ之ニ限リ之ヲ決シ得ルニ止マルニテハヤ
 法律の疑義ハ一經ノ問題ニシテ現下ノ實

外務省
 文書
 第...
 第...



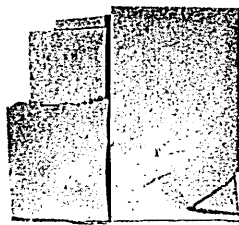
際河越トシテ以上ノ事實ハ或場合ニ於テ権
 限ノ外ニテ来スニトテキニ非ラサルニ権限ノ範
 圍内ナラスニハ二頭政治ノ弊ハ免カル可ラス現
 下ノ實状トシテ軍政官及領事官ノ人ノ官ニ
 特ニ権限上ノ争議アルヲカスト名モ後ニ
 人ノニニ頼ルハ理エト其ノ人没スハ其ノ政
 度ハノ已ムナキ場合アルヘク随ツテ相當ノ能
 度ヲテ相互ノ権限ヲ劃定スルハ法治トシテ於
 テ必要ノ件ニ存スルニ思ヒ軍政官カ
 介日理ニ示判スルノ裁判ナルモハ強ク
 不當ノモノトハ謂フ可ク其ノカ軍人ノ可學
 不常ノ裁判トシテハ其ノ実績率口實
 等ニ依ルニ是レアリト名モ本末軍政官

ノ下ニハ特ニ常事裁判ノ事務ヲ整理スルニキ
 概突アルニアラス將々之ヲ示判スルニ當リテ今
 日ヲテハ何等ノ準據スルニ法令ノ備ハレハ人ニ
 非ス畢竟スルニ惟軍人ノ必要ナル名ノ下ニ之
 ヲ逮捕シテ任意ニ刑ヲ定メテ之ヲ執リテス
 ルニ止マナリ戰闘区域内ニ於テ人這般ノコト度
 タ巴ムヲ得ヤトシト名モ現ニ管官ハ其ノ領地ナ
 ルニモセヨ既ニ軍港場トシテ各官人ノ來世自
 由ニ且ツ帝領ナリ既ニ級位トテ其ノ人保
 護ノ任ニ當リ居ル今口テ其ノ司法ノコトハ
 特ニ最モ奇キヲ置リテ可ニシテ其ノ犯罪者
 ヲ審理スル断スルニ當リテハ極メテ慎重ナリ
 擬律ヲ行フニ非ラスニ延イテハ累テ帝領政



府ノ上ノ及ホスナキヲ保セリ
 滿洲支領地施政ノ件ニ下題セル該施政ニ及
 スル内閣ノ方針箇條者中ニ「日本國領中ノ
 牛莊領事ハ我ニ於テ管口ヲ占領スルトハ時
 ニ之ヲ撤任セシメ普通領事ヲ充テ管理ス
 ル以テ領事團ノ會議ニ臨ミ我意思ヲ發表
 シ領事團ノ請書地方官官ノ交渉ヲ監視
 セシメ之ヲ各國領事トシ我軍政府トシ立
 ケ意思ノ疏通ヲ計ル等ノ任ヲ當ラシムトテ本
 官ハ此一節中ニ三箇ノ疑義アリト思フ其
 一ハ普通領事ノ事務トシ國際慣例上領事
 官トシテ當然ノ事務ノ一ヲ指シ特ニ國際
 條約ノ規定ニ準據シテ司事スル領事ノ裁判

ノ務ノ如キハ之ヲ我ニ除スルニ義
 ナルヤト疑官ニシテ其意ニハ我意思ヲ發表スル
 ノ我意思トハ如キ領事官ニ依リテ發表セ
 ラルニキ帝皇政府ノ意思トヤ將今ノ當該
 地方ノ施政者ハ軍政官ヲ此際通シテ發
 表セラルニキ帝皇政府ノ意思トヤ今ノ當該
 リ而シテ其意三ハ若シ帝皇領事ノ任ヲ以テ
 各國領事トシ我軍政府トシ中間ニ立ツ可
 意思疏通ノ一核ヲ爲シト爲シ帝皇領事ノ條約
 上及法律上ナキ格故ハ此意者ニ對シカ何
 ナル程度ニ之ヲ行使シ得ルヤハ點是ナリトス
 之ニ至ルニ立案者ノ趣意ハ明瞭ナラズトモ
 完ク今ノ領事ノ位置ハ其當然ノ權能



行使する上を於て猶も困難なり情ナキニアラス
 今日管口に於て和約人ヲ取締ル者トシテハ軍
 政官ハ主位ヲ占ム領事ハ客位ニ在リ事以國
 人ニ重ク人子件ニ於てハ軍政官ハ多ク場合
 形々領事ハ意見ヲ示サテ事理ヲハ慣
 例ニ由ルモ軍政官ハ必ス之を以テ為サレハ
 ナラス責務アルニ非ズ隨テ領事ハ惟軍政官
 ヲ相対シ受ケタル場合ハ已レ意見ヲ
 申述ツル止マテ例ヲ適切ニ現下兩者權
 限ヲ云ハルサテ軍政署ニ持テ來ル事件ハ
 軍政官ニ於テ之ヲ事理シ領事ハ彼ヲ持テ
 來ル事件ハ領事ハ之ヲ事理シ居ルト謂
 テ可ク此等ナリ他ニ場合ニ於テハ在る和約

人モ其ノ帰依スル所ニ惑フコトアナキヲ保ス是
 レリ政ノ本旨ニ非ラザレバ官ヲシテ忌憚
 ナク云ハレハ最良ノ制ハ軍政官ト領事ト官ト
 之ハ一人ニ兼授セシメテ職務ノ異ナル部外
 ハ資格ヲ異ニシテ之ヲ事理セシムルニテ惟軍
 政官トモハ軍人ナル局ニ當リテ始テ其
 名アズルコト下解スル代スニ民政官ノ稱ヲ以テ
 之ニ示スルモ不可ナラズトモハ後治時代ニ於
 テ領事ハ民政官ノ職ヲ兼授シ居ルニモ畢竟
 同一趣意ニ出テト思ハル者ナラズ右ノ兼授
 云々ハ現下ノ方針以テ爲スルコトセハ必ズ
 前途ノ如ク軍政官ト領事トノ權限ノ範圍
 明確ニ劃定シ置ルコトヲ將來ニ於テ了争

則して可致之調査に解決之報告を以て場合の如
 キに様子の領事ハ其の當然ノ職責トシテ概シテ
 軍人ヨリ一日ノ長アハ軍部ノ者ヨリカ故ニ軍
 政官カ務メテ先ツ之ヲ領事ニ諮ラサル意
 見ニ聽ク之ヲ返答スルコトヲ為サレ均ク之ヲ
 シ代表シテ内地ニ駐在スル軍政官カ領事
 中ノ職務ヲ承テ漸ク之ヲ確トナシ以テ兩者
 ノ権限上ニ係ル現下幾分ノ遺憾ヲ令然
 際即シ得ニキヤ

此の如き

寫

明治廿二年五月廿五日

支那ノ領土

採察隊者為軍部ヲ轄スル区域内ニ於テ行
 取規則及軍律ヲ制定スル等ハ帝國領
 事トシテ地駐在軍政委員ノ官ニ現存スル
 裁判事務ノ權限ハ範圍ヲ承知シ度ト存
 之別紙寫券一紙ノ通リ領事ノ問合
 セヨル處別紙寫券二紙ノ通リ回答ニ接シテ
 高シキ件ニ關シテハ由信支書ヲ領事官彼地
 へ出張ノ際實地目録ノ事情相認シ覺悟
 トシテ差出スル付令便別信ノ字及以送付
 書台右ニ就キ以テ通憲相成度ヲ別具
 明治廿二年五月廿五日

遼東守備軍司令部附

10192

公使彼等書官川上俊彦

外務大臣男爵小村壽吉

別紙官印

採留係者地方之行政及在
留中於人取係方之官上
地與人官軍政委員之官上
權限範圍方之行政下之
下之地位及在留中於人
之裁判事務之取係之軍
政委員之職務上之係
置度之官打返之由報相
煩之度此致
得之意之致具

明治廿七年七月一日

在留中於人官軍日令部付

公使彼等書官川上俊彦

10103

右官官
部、河川淺之進殿
夕
登
省

[Faint vertical text in a large rectangular frame, likely bleed-through from the reverse side of the page.]

裁官官二并
治部一九月
各地之裁官官裁判事務取扱方ニ要シ本月
十百(台ノ語カ)付シ以テ尋裁ノ極了承
事地ニ日下軍政署、多様ニ所スルヲ以テ清國
人ノ對スル裁判事務ハ口署ニ於テ之ヲ取
扱カ外ハ人、被告ノ場合ハ各所為國領
事ニ於テ裁判發片及行ニ帝國臣民、被
告タル場合、於テ本官、裁判權ニ屬ス
モ、之方ニ尤モ軍事上ノ必要ニ要ス係アル
場合ハ軍政署ニ於テ適宜ノ措置ニ出
ツルニ下勿論、且、所々官右様少承ハ相成
度此取回答申進メ裁官官

明治二十七年十月十日

在外事務

領事館に送る

陸軍省軍令部附
公使館に寄附官川上俊彦殿

外務省

書翰

明治二十七年十月十日

陸軍省軍令部附

陸軍省軍令部附
公使館に寄附官川上俊彦殿
明治二十七年十月十日

公使館に寄附官川上俊彦殿

寫

10202

外務省

[Faint vertical text in a large rectangular frame, likely bleed-through from the reverse side of the page.]

別府甲子

占領地域内ニ於テ施行スル軍政ノ裁制
事項ニ関シ生シタル疑義ノ了歴

憲兵守備軍司令部ニ於テ是ノ旨ヲ將ニ其ノ旨
轉正域内ニ於テ施行スル軍政ノ裁制トシテ爰
内ニ於テ政規則ヲ編成スルニ付テハ以上書記
ハ本年ノ係長ニ付テ之ノ旨ニ依リテ
即チ信書ヲ官ラシテ十八條ヲ成ルル政
規則案ヲ起草セシメテ之ヲ内軍政委員
占領地住民及本邦人ニ對シテ裁制權限ヲ
概括的ニ規定スル其旨ニ依リテ
軍政委員ハ当該地方ノ治安ヲ維持

ト 署名

予等轉々ハ軍法會議ノ精神ニ遊々シ人馬
 時ニサシ瀆刑方ヲ軍政官憲ニ委スルモ必ス
 シモ遺法下ニテ可ラス憲法法律トシテ疑義
 下リトヤハ其ハ軍法會議ニ係ルモノヲ轄シテ
 ラスレテ軍政官憲ノ裁判權ハ該軍政
 官憲ノ管轄地域内ニ於テスル帝國領土
 ノ裁判權トシテ係ルモノトシテ意見ヲ
 之ヲ別紙ニテ寫シテ其意見書トシテ系謀長
 ノ事務ニ供スル系謀長ニ以テテ裁判ヲ頂
 後ハ下級ニ係ル此際ハ法學者ノ見解ヲ
 徵スルヲ學便利ナリト思ヘテ當時亦之
 軍司令部ニ法律顧問トシテ勸告スル法
 學博士ハ其長雄ニ宗親トシテ書ク裁シ

外 務 省

予等向ヲカスル博士ヲ別紙ニテ寫シ
 大体ニ於テ右修訂案ト取リテ精神ヲ一ニセ
 ル回答アリテ之ト回答ニ未ダ充テ意
 シ今サレド点々ニ形々ニ以テ信文書記官
 ニ更ニ索リテ之ヲ軍司令部ニ出張シ
 博士ニ就テ之ニ別紙ニテ寫シテ意見ヲ徵ス
 ルヲ得ルヲ注意見書ハ同書記官ニ於テ其
 取リタル要領ヲ筆記シテ後博士ニ示シテ其
 確認ヲ得ルモノトス
 行政規則案ニテ後更ニ多少ノ改竄ヲ加ヘテ
 而シテ其確定後案ハ之ヲ軍司令部ニ向
 者ノ考慮中ニ居ルニ示シテ其施行期ニ
 之ニ伴フニ要スル條文ハ後規則確定後案ノ

ト 第 一 頁

10203

第十條トシテ

軍政委員ハ管内ニ在リ帝皇臣民ヲ管理シ軍人軍所及常人ノ犯罪リテ陸軍檢察官ニ移シ軍法會議ニ附スル手續ヲ為サレリト改メテ即チ帝皇臣民ノ常人ノ犯罪軍法會議ノ所管ニ付セリテ原則ヲ採ルニ至リ

外務省

刑部

遼東守備軍行政規則案第六條

常人ノ犯罪シ軍法會議ニ審判ニ付

スル規定及之ニ附屬スル裁判

權ニ要スル疑義

遼東守備軍行政規則案第六條ニ掲ケル常

人ノ犯罪ヲ指シ常人ノ犯罪ニ止マラス

常事犯罪ニモ之ヲ包含スルコトセシカ

之ヲ軍法會議ニ審判ニ付セザルハカ

ラズトノ意見見ユルニ

一軍法會議ニ陸(海)軍治罪法ニ依リテ

成セリ軍人軍所ニ対シテ裁判ナリ

軍務行政檢査ニ付テスル軍人軍所

行政受る者ヲ軍法會議ト稱ス之ヲ軍
 政官憲ニ稱ス帝立憲法亦天子四條及第
 五十七條ニ據解ス之ヲ奈何ト爲レハ憲法亦
 二十四條ノ「日本臣民ハ法律ニ定ムル裁判
 官ノ裁判ヲ受ル」ノ權ヲ奪ハレトナレト
 法理ニテハ換言スルハ國法上裁判官ト稱ス
 ハ司法官憲ヲ資格リテ政令令々以テ定ム
 ハキニ此ラスト云フノ義ニ以テ又其亦五十五條
 「司法權ハ天皇ノ名ニ於テ法律ニ依リ裁
 判所之ヲ行フ」ト「天皇ノ名ニ於テ司法
 權」ヲ發動スル所以ノ淵源ヲ示ヤルモノニ止マ
 リ其後段ノ意義ハ國法上裁判所ト稱ス
 ハ司法權ヲ行ハルノ裁判所構成法ナ
 ン

御
 職
 權

ハ法律規程範圍ニ於テス「レ」ト「コト」ト「ヨ」ト「ス」
 裁判所及裁判所ナル親會ハ帝國立憲法
 ノ上ニ於テハ刑式上ノ親會ナリ然レテ立憲法
 ノ條條項項ヲ以テ軍法會議ノ權能ヲ云々
 せんハ妥當ト云フハカラス何ントナレハ軍法會
 議ハ帝立憲法ノ謂ニ裁判所ニ非ス其ノ
 審判官ハ亦其謂ニ裁判官ニ非ラセハナ
 リ
 以上ノ理由ヲ以テ本官ハ占領地内ノ日本臣民ニ
 對シテ司法權ヲ持テ軍法會議ニ委スル
 キト爲ラト主張スル理由ヲ若見ルニ終ルル本官
 ハ司法權ノリ何レ占領軍ノ軍政官
 憲ニ委ラセ占領ノ性質上何等ノ支障ナ
 ン

10294

一、軍法會議ニ依ルニ平軍政官憲ニ委スル平
 二、就テハ後ヲ疑フノ餘地ヲ存スル惟理ヲ以テ國際條約
 三、ヲ侵スコトナクシテ領權ノ下ニ軍政官憲カ如
 四、何シテ範圍ヲサテ司法權ヲ行使スルヲ得キ
 五、乎ニ就テハ予ニ於テ總メ之ヲ弁完シ其法權
 六、ノ範圍ヲ劃定シ置ルノ等ニ我々取ル下ニ立
 七、以テ常ニ各官憲相互ノ權限ヲ侵スル以テ切
 八、コトナラズ

外務省

別紙丙子

一、採敵遠東守備軍司令官官ノ裁判權ニ付テ下
 二、同ノ件日本臣民ハ何地ニ在ルモ日本ノ主權ノ範圍
 三、ノ對シテハ日本憲法ノ保護ヲ受クル我々有リ古
 四、領權ニ日本ノ主權ノ範圍ニ在リテ有リテ我々憲
 五、法ニ依テ日本臣民ハ法律ニ定ムル裁判官
 六、ノ裁判ヲ受クル權ヲ奪ハルコトナシ
 七、ハ日本臣民ニ適用スルモノト解釈スルノ外テ明
 八、治ニ七八年戰役中我政府ノ取ルモノ法理ニ亦
 九、此ノ如クニ是レ如何ニ裁判ヲ轉ハ要スルニ
 一〇、相成ル

一、在テ領地軍人軍官各種犯罪ノ所屬部
 二、隊ノ軍法會議ヲ行テ裁斷シ臨時軍法會

一 漸く開くタル地方に在リハ其臨時軍法會議
 二 在占領地常人、在罪に付テ左ノ區別アリ
 三 陸軍刑法中常人ニ適用スル明文アリ
 刑罰ニ就テ其ノ土地ヲ管轄スル部隊ノ軍法
 會議又ハ臨時軍法會議ニ於テ管轄ス
 四 右ノ外一租ノ犯罪ニ就テハ臨時軍法會議
 ヲ設ケタル地方ニ限リ廿八年勅令第九十二
 号第一條ニ依リ臨時軍法會議ニ於テ管
 轄ス臨時軍法會議ヲ設ケタル地方ニ在テ
 ハ管轄者ナシ
 三 民事ハ軍人軍属タルト常人ト同ク在
 領地ニ於テ之ヲ管轄スル機關ナシ但シ居留

地ノ領有者ノ裁判權ニ屬スルモノナリ
 本條ニ於テ之ヲ(下略)
 三十七年三月二十六日

法学博士 多野長雄

神尾源一少将軍系法長閣下

10205

外紙丁子

占領地域内ニ於テハ裁判事項ニ至ルニ法律
學博士方賀長雄氏ノ意見要領

希ニ占領地ニ於テハ國領地トシテ之ニ於テ其ノ
性質ニ異ナル所アリ見ユ即チ占領軍ニ於テ苟
強占領地域内ニ於テハ全般ノ行政ヲ施シ
ルニ義務ヲ有ス軍隊ノ必要上ニ係リ行政事項
ニ至リテ是レ止ルベシトス
占領地域内ニ存スル和約居民ニ對シテ司法管
轄ニ就テハ意見ハ左ノ如ク即チ明治二十八年六月
ノ臨時陸軍ニ法律令第五三號ノ發給地内ニ於テハ
陸軍刑法ノ適用ニ關スル勅令第一三條ニ據リテ所

外
紙
丁
子

5-0392

0237

ノ常人ノ犯罪トハ常人ノ軍ヲ犯スルヲ云フ其ノ常
 軍犯ヲモ包含スルヤ否ヤノ別ニ對シテハ若シ軍ニ
 常ノ軍事犯ノミトセム常人ノ軍事犯ヲ受轄
 スルハ既ニ軍法會議ノ權能トシテ陸軍刑法及治
 罪法ニ依リテ之ヲ以テ裁量スルコトモ之ヲ
 規定スルノ要ヲ見サレバ隨テ其謂フニ犯罪トハ
 常事犯ヲモ包含スルト見ケル外ナシ尤モ曰條ノ常
 人ノ犯罪ヲモ審判スルヲ得ト記シタルカ故ニ必スモ
 之ヲ得ル陸軍刑法會議ノ所管ニ委スルヘシ
 ト強刑法ニ非ラザルハ勿論ナリ去リ乍ラ之ヲ帝
 國憲法ノ司法權ニ係ル條文ノ精神ニ顧ミ
 軍法會議ナルカ憲法ニ謂テ裁判所ナシヤ
 得ル軍法會議ノ審判官カ果シテ其謂テ裁判

例 雜 條

官ト稱シ得ルヤ否ハ別ニ考ヘテ之ヲ實ニ自領地
 内存在ノ帝ノ臣民モ其自領地内ニ在リテハ故
 シテ憲法ノ保護ヲ脱スルコトモ謂ヒ得ルカ故
 ニ要スルニ其ノ裁判權實ヲリ行政官憲トスルコト
 モ以テ之ヲ臨時軍法會議トナス方妥當ナリト
 思ハレ
 然レ上ニ民事訴訟トテ自領地軍務官憲ノ於テ
 勅解的ニ之ヲ調理スルノ外之ヲ訴訟トシテ取扱
 フヘキ裁判官トシテ之ヲ設ク者ハ唯其ノ訴訟ノ内地
 於テ提起スルノ外ナキナリ
 明治三十八年二月九日官制制定ノ自領地人民ニ對シテ
 ノ法律及即チ前記ノ精神ニ基キテ之ヲ以テ即
 チ同條ノ令ニ帝ノ臣民ノ犯罪ヲ受轄スルハ裁判權

閣下認メス又一般ノ民ヲ訴訟シモ想定セザリシモノト
不問令邦七條ノ民事ノ事ヲ訟ラ善理スレトハ紛解
的ノ精神ニ過キテ法律ニ合ハズ法律ニ照ラサハ民法
二十七年ノ自發布令ハ城市ノ政規則第七條ハ在
願地所在日ハ居民ノ裁判ヲ權ニシテ裁カ取
府ノ之裁一定セザリシ前ノコトニテ憲法第七條
ノ條旨ハ戰爭中口旁ニテ一條ノ命ヲ中止セザル
モノト見做シタルモノナリ其後二十八年二月ノ
令令ハ政府ノ之裁一定シタルコトヲ右列
リ政規則第七條ハ自然消滅シタルモノナリ
尤モ在領軍ニ於テ前記ノ精神ニ準シテ裁判
事務ヲ施リタルコト不便ナリト認メテ
近年其憲法民政ノ創始者時ヲ行ケルカ如ク裁

判ヲ務メテ行政官意ノ多クナリテ不
可ナラズニ唯此場合ニ於テハ裁判ナリ
法ヲ務メ性質ヲ脱シテ憲法ニ執ル係項ニ
授ルコト要ヤシ一種特別ノ行政事務トナリ
又此方針ヲ執ルニ就テハ政府ラシテ有侯在領
地方統治上ノ大方針トシテ之ヲ取捨セザル
ベカラズ換言スレバ方針ハ軍ヲ裁スル大
管着ハ軍令中ノ意圖ト出テスレテ國務
軍中ハ内閣ノ方針トシテ決定セザルハ
在領軍務官ニ對シテ在領地域ノ領事裁
判ヲ務メテ在領國トシテ職務ヲ係ル
ト云フニ在領國トシテ在領國トシテ
ハ條約中領事裁判權ノ如キ本邦
ト答

施行するを得ハキ規定事項ハ在領了了實了
 開始下共ニ其ノ活動ヲ停止セラルルニ至ルト見ルテ
 徳者トス又各中至ニ領了カ我軍ノ在領地
 内ニ存在スル其ノ國ノ臣民ハ條約ニ依リ有る
 領了ノ裁判權ニ至ルニ我軍ハ之ヲ尊重スル
 中義務ナシ何トナレハ外國領了ハ實際サレ地
 方ニ権力ヲ有リテモ、領了ヲ得テ其ノ職務
 履行シテハキ軍人ト一視スル原則タルニ至ラス以
 國軍カ其地方ヲ在領了ル場合ニハ外軍
 認可ヲ受ルルニ至ルニ我軍及日本
 ノ台領在領了場合ニ至ルニ現ニ在領軍
 ハ必要ト認了ルハ其後區域内駐在ハ外國領事
 ノ職務執行ヲ停止スルニトモ為シ得ルナリ故

各國領了ハ其ノ職務ヲ執行スルニ至ルテ
 ハ軍了了上ノ必要ノ許ス範圍内ニ於テ軍司
 令官ノ指揮ノ下ニ之ヲ行フモノト解新スル
 可ナラトス右ニ在領地ノ在領了ノ駐在地ニ於
 テハ條約ニ依リ領了カ條約上ノ裁判權ヲ我
 軍ノ好意ニ依リ一時日本ニシテ之ヲ行使スル
 居各地ノ在領了ノ駐在地ノ地理的
 区劃ニ依リ市場内等ニ依リテ區別スルハ以テ
 日清條約上清軍官憲ノ取扱ニ依リ至ルニ裁
 判ノ權向ハ清軍人ノ被了ル人民ノ訴了
 如キハ清軍官憲ノ撤退ノ後我軍領軍
 務官官憲ニ代リテ之ヲ取扱シ得ルモノトス

此種場合ニシテ受審權ニシテトシテ法律
理ニ服スルコトヲ法律ニ官署ノ自署ニ
来シテ裁判事務ノ仲裁的ノ法理ニシテ
之ニテリコトナキ由テナリトス

軍法ト軍律トノ異同ニテ即チ軍法ノ國
内法ヨリ軍律ノ交戦權ニ基テ國際法ノ慣
例ナリ軍法ニ於テ被告ヲ善意者ト推定
シテ其審問ヲナスモ軍律ニ於テ初メヨリ之ヲ
有罪者ト推定シテ審問ニ被告ヲシテ其反
証ヲ呈出セシムルヲ必要トス要スルニ軍
律ハ陸軍刑法ニ由テ又ハ内法又ハ内
法ニ實際ニ適用シ難キ特殊ノ事項ヲ規定
スルコトニシテ其規定ノ事項ハ勿論軍法ニ至

係スル事項ノナリトス二十八年大本營制定ノ
分領地ノ民衆ノ令ニ包括シテ之ヲ軍律
ト云フモ其ノ軍律ノ實質ニ由テ之ニ係ル規定
事項ナリ

軍法ト軍律トノ異同ニテ即チ軍法ノ國
内法ヨリ軍律ノ交戦權ニ基テ國際法ノ慣
例ナリ軍法ニ於テ被告ヲ善意者ト推定
シテ其審問ヲナスモ軍律ニ於テ初メヨリ之ヲ
有罪者ト推定シテ審問ニ被告ヲシテ其反
証ヲ呈出セシムルヲ必要トス要スルニ軍
律ハ陸軍刑法ニ由テ又ハ内法又ハ内
法ニ實際ニ適用シ難キ特殊ノ事項ヲ規定
スルコトニシテ其規定ノ事項ハ勿論軍法ニ至

103

空下

第507號

七

生

在



同録付

機密第一七號

三十八年三月七日抄

牛莊ニ於ケル我軍政施行ノ現状ニ關スル別紙報告書
一通差進候間御査閲相成度此段申進候敬具
明治三十七年十二月二十八日

在牛莊

領事瀨川淺之進



外務大臣男爵小村壽太郎殿

追テ本報告書中ニ人事ニ涉リ候記事ニ有之
候一共右ノ閣下ノ御參考マテニ記述シタルモノニ有
之候此段為念申添候也

外務省

10372

牛莊港ニ於ケル我軍政施行ノ状体

營口軍政署ハ本年七月下旬我軍營口占領ノ當時
 始メテ設ケテレタルモノニテ最初ハ滿洲軍總司令部
 ノ所屬ナリシモ本年九月遼東守備軍ノ設置ト共ニ
 同守備軍管轄ノ下ニ歸セリ軍政署長ハ軍政委員
 與倉陸軍歩兵少佐ニシテ其部下ニハ歩兵大尉
 一名憲兵大尉一名アリ歩兵大尉ハ諸般ノ事務ニ
 於テ署長ヲ輔佐シ憲兵大尉ハ主トシテ警察事務
 ヲ管掌セリ此他第一軍司令部ヨリ臨時派遣ニ未
 レル歩兵中尉一名アリテ専ラ中外人ノ行動探偵ニ関
 スル特別事務ヲ擔任シ居レリ

五ノ五日本頁

五ノ五日本頁

軍政署内ニ於テ軍政委員ノ命令、下ニ百般ノ事務
ヲ執レルモノハ此外ニ陸軍通譯及ヒ下士アリ陸軍通譯
合計九名ノ内英語通譯一名他ハ皆十清語通譯ナ
リ又佛語ニ通スル陸軍教授一名ハ目下榆營鉄道
停車場内ニ在リテ該鉄道搭載ノ貨物及ヒ往來
旅客ノ検査并ニ電信ノ検閲等ニ關スル特別任務ヲ
擔當シ居レリ

我軍政署ハ露國占領ノ後ヲ繼承シタルヲ以テ施政ノ
大体ニ於テ露國民政廳ノ為セシ所ト殆ント大差ナシ
即チ明治三十三年露國ノ占領以來當地ニ清國
地方官ノ在任スルコトナキヲ以テ我軍政署ニ於テハ營口
在住清國人ニ對スル政務ハ悉ク之ヲ處理シ租稅ノ徵
收、稅關ノ監督、土木、衛生、警察并ニ清國人ニ關スル

裁判事項及外國領事ニ對スル交渉事件等一トシテ
軍政官ノ管理スル所ニアラサルハナシ此他尙ホ軍事上ノ
大要ニ基キテ事件ニ関シテハ外國人并ニ本邦人ニ對シ
テモ往々臨機ノ處置シナスコトアリ

軍政署ニ於テハ已ニ諸般ノ事業ヲ經營セリ即チ道
路ノ改修、事務所ノ修築、電話ノ買收、學校ノ設立、
公園ノ起工等ハ就中其重ナルモノニシテ此他營口市内
ニ市場ヲ新設シテ野菜、果物及肉類等ノ販賣場外
ヲ定メ屠場ヲ新設シテ牛羊家猪ヲ隨意ニ屠殺スル
コトヲ禁止シ、娼妓ニ課稅シテ檢査ヲ實施シ、車捐局
ヲ設ケテ車稅ヲ徵收スルカ如ク僅ク數ヶ月間ニ於テ新
ニ開始シタル事業亦サナシトセサルナリ

道路ノ改修ハ東營口市街ノ樞要ナル部分ヨリ着手シ

五ノ十ノ日ノ本頁

地中ニ砂利ヲ埋メ而側ニ水抜ヲ作り従来ノ不潔ナル支
 那風ノ道路ヲ變テ平坦ナル大道ト為スモノミテ已ニ正
 金銀行ノ西方ヨリ領事館ノ門前マテハ落成シ今後益
 ヲ進ニテ牛家地マテ連續セシムル計畫ナリト云フ又現
 在軍政署ノ事務所ニ充用セルニ階造リ建物ハ露
 國ニ於テ民政廳事務所ニ當ツル目的ヲ以テ昨年中工
 事ヲ起シ本夏半成ノ儘之ヲ拋棄シテ引揚ケタルモノニシ
 テ我軍政署ニ於テハ右領以後急ニ工事ヲ加ヘ先月中
 落成シ屋上ニ金色ノ菊花紋章ヲ表出シ營口居留
 地ノ中央新ニ宏大ナル我一大官衙ヲ現出シタリ
 電話交換局ハ昨年露國ニ於テ設立シ本年之ヲ
 米國人ニ轉賣シタルヲ更ニ軍政署ニ於テ買取り管
 理セルモノナリ又學校ハ清人ニ日本語ヲ教授スル為メ

營口税関

設立シタルモノニシテ瀛華實學書院ト称ス生徒ノ現在
 數ハ五六十名ナリ又軍政署ノ事務所ノ前面ニテ數千
 坪ノ空地ヲ開キテ新ニ公園ヲ作り其中ニ池ヲ掘リ亭
 ヲ立テ目下尙ホ工事中ニ属ス
 軍政委員ハ營口税関ヲ監督スル權アルヲ以テ新舊
 兩海關ノ稅務司ハ全ク軍政委員ノ願使ニ從ヘリ兩
 海關ノ收入金ハ總テ當地ノ橫濱正金銀行支店ニ於
 テ保管シ新關收入金ハ露國右領當時ト同一ノ
 筆法ニヨリ清國政府ノ收入ニ歸セシムルモノナリト雖モ
 舊關(即チ鈔關)收入金ハ我軍政諸般ノ經費ニ充
 用スルモノニシテ前記各種ノ新經營ニ要スル費用ノ如キ
 モ亦皆此中ヨリ流用スルモノニアラサルハナシ
 軍政署ニ於テハ舊關收入金ノ外ニ營口在住ノ清民

王ト在日木頭官

ヨリ納付スル營業稅及家屋稅、收入アリ此税金ハ公會ニ於テ各戸ヨリ徵收シ地方稅トシテ之ヲ軍政署ニ納付スルモノニシテ軍政署ニ於テハ主トシテ之ヲ保甲局ノ經費ニ充テ支那巡捕ノ給料、如キ皆ナ此中ヨリ支出スルモノナリ右公會ハ當地ノ紳商等、組織スル團體ニシテ時トシテハ軍政官ト市民ノ中間ニ立テ諸般ノ便宜ヲ計ルエトアリト云フ

新関稅務司代理ギルクリストハ米國人ニシテ年齒漸ク三十六七一見頗ル淡泊快活ノ人ノ如シ然レトモ我軍政委員ノ言語ヨリ察スルトハ軍政署ニ於テハ深ク同人ヲ信シ居ラセモノ如シ且ツ副稅務司代理ニシテ舊海關長タル黑澤禮吉モ亦外觀上ギルクリストトハ甚ク親密ナラハルモノノ如シ此ノ如ク兩者ノ關係疎隔ニテ互

ニ猜疑ノ念ヲ挾ムハ決シテ喜フヘキ事ニアラスト虽モ黑澤トギルクリスト間ノ感情并ニ之ト軍政委員間ノ消息如何ハ局外者ニ於テ容易ニ了解シ能ハサハ所ノモノアルナリ軍政委員ハ即チ營口ノ地方長官ニシテ他ノ開港場ニ於テハ海關道ト同一ノ資格ニヨリ外國人ト清國人ノ間ニ起リシ事件ニ関シテハ外國領事ト直接交渉ノ任ニ當ルモノナリ又營口在留帝國臣民ニ関スル事項ハ帝國領事官ニ掌スル所ナルモ軍政委員ハ土地ノ警察權ヲ有スルヲ以テ直接警察上ノ取締ヲナシ且ツ軍事上ノ必要ニ應ヒテハ臨機ノ處分ヲナスコトアリ尤モ裁判上ノ事ニ就テハ民事刑事トモ凡テ帝國領事館ニ於テ審問ヲナセリ高ホ之ニ関シ帝國領事ト軍政委員ノ權限ヲ一層明確ナラシメン為メ本月二十三日付ヲ以テ遼東守備軍

參謀長ヨリ當地ノ軍政委員ニ左ノ如キ通牒ヲ發セ

今般遼東守備軍行政規則發布相成り貴軍政
官ノ權限ハ第一類ノ地域ニ於ケル規定ニ準據スルニ
ニ相定候モ同規則第一條ノ軍人軍属以外ノ帝國
臣民ノ犯罪者ハ之ヲ營口駐在ノ帝國領事ニ移シ又
地方ノ安寧ヲ妨害セントシ若ハ風俗ヲ壞亂セントス若
ニ對シ在留禁止處分ヲ行フコトヲ要スル場合モ同様
ノ儀ト御承知相成度候

本年八月小官當地ニ歸任、當時曾テ申報ニ置キ
ルル如ク今回ノ日露事件ニ就キテハ諸外國人ト清國人
トヲ論ヒス何レモ我國ニ對シテハ深キ同情ヲ有スルヲ以テ
露國ノ營口占領當時ニ於テ内外人カ露國ニ對シ懷

抱シ居タルカ如キ不快ノ念ヲ有スルモノアラスト臣モ軍政ハ
素ヨリ軍事上ノ事件ヲ機宜ニ應シ處弁スルヲ以テ其本
旨トスルモノナレハ當地ノ如ク内外人雜居ノ地ニテ清國
人ニ對スル行政上及ヒ司法上ノ事ヲ處置シ又外國人ニ
對シ生スル諸般ノ紛糾ナル事件ヲ妥弁ニテ遺憾ナキ
ニ至ラシムルカ如キハ其長所トスル所ニアラサルカ故ニ今後
若シ永ク我軍政ヲ當地ニ敷キ清國地方官ノ歸還
ヲ許リサルニ於テハサキモ其僚属中ニ裁判上及外交上ニ
經驗ヲ有スルモノヲ採用シ而シテ司法及外交ノ事ニ関
シテハ一層ノ慎重ヲ加エ内外人ヲシテ我施政ニ満足セシ
ムテ永ク其同情ヲ維持スルノ道ヲ講セサルカラス是レ
小官當地ニ在リ親ク我軍政實施ノ状態ヲ目撃シテ
深ク當局者ニ望ム所ノモノナリ

王ト在ヨト頁

女子ニシテ何等ノ目的モナク當地ニ来タリ遂ニ其身ヲ
若殿ニ沈ムル者アルモ獨リ本人ノ不幸ナルノミナラス當港
全体ノ風紀ニモ關係スルコト甚カラサルヲ以テ今後斯ル
渡航者ニ對シテハ可成本邦出發前充分ニ注意ヲ加ヘ
彼等カ當地ヘ到着後後悔スルカ如キコトナカラシメン
コトヲ希望ス

105
不用

2018

機密第一一號

營口牛家屯間陸軍倉庫
敷地貸下ニ関スル件

一 營口牛家屯間、新道ハ第テ当地軍政署ニ於テ
 開修ニ着手シ著多クシテ該新設道路ニ沿フテ兩
 側奥行各五十間目ノ地面ヲ買収シ此取之レニ
 陸軍倉庫敷地ナル名称ヲ附シ大要ヲ内規ニ
 シヨリ一般奉邦人ニ貸下セテト相成ル
 一 貸下地ハ別紙図面ノ如ク新設道路ニ平
 行シテ其左側ニ五間ノ距離ヲ距テ、各巾五間
 ノ道路ヲ作り同目トスルツノ地区ニ分割シ毎区
 表通ハ二百五十坪裏通ハ二百坪トナス
 一 位置ノ好否ヨリ各地區、四個ノ等級ヲ附シ

明治廿八年八月十四日付

陸軍省

陸軍省

陸軍省

左記ノ貸下料ヲ徴収シ毎月三ヶ月分ヲ納付ス

壹等 一月一坪 五錢

貳等 " " 四錢

參等 " " 三錢

肆等 " " 二錢

一、六以上連合等一地区ノ貸下ヲ妻ケントモ片ハ土地
使用權ノ國ニ契約ヲシ其契約ノ字ヲ提出セズ

一、土地借妻者ハ其使用權ヲ他人ニ讓與スル
ヲ得ス

一、同人地区ノ貸下ヲ希望スル者數人モ付ハ其局
人ニ貸下クヤヤハ兵站司令官ニテ定ム

一、土地ノ借妻ケルモノハ五ヶ月以内ニ還却シテ自

手ニシ

一、土地ノ等級ハ必要ニ應ジテ之ヲ變更シ貸下料ハ
之ヲ増減スルニ可シ

一、貸下地ノ官ノ必要アリ又ハ借妻人ハ不都合ノ行
為ニ付ハ之ヲ取上ケテ得ル

右道路右側ノ敷地ハ前々軍政官ヨリ日本人ヨリ
ニ讓與ノ約ヲシテ同命ヨリテ之ヲ管理スル事ナリトモ

其後軍政官ヨリ都合ニテ再ハ之ヲ取戻シ見モノナリ
今般之ヲ居ル人ニ貸下クニ就テハ最初ノ國信ヨリ

ソニテ日本入借ヨリモ妻夫ラ出シ軍政官ノ土地妻夫
ト共ニ其貸下ニ關テ協議ノ一ツノ處理スルトナ

リ就テハ本館ヨリモ一名ノ委員ヲ派シ之度台申奉
リ以テ右ノ本官ノ意見ヲ陳ベ且本件ノ進行ヲ

行下ノ日本領事館

了知るに便利なる字號更一名ラシクニ急典セシム
 下ト教置ル尙当地在商人久多通清は居海
 地ナキニ昔シミ居ルン折柄今般軍政署ニ於テ危候
 倉庫敷地ノ實下ノ用候事ニテ右傍ニ赤地
 者ノ其多クテ已ニ致シテ其全部ニ對シ申入ル
 トノ下ニ又陸軍省ヨリ見込モル如クニ
 牛字地百ニ我大庄有地ニ作ラセテ見込モル如クニ
 軍政署後方即間ノ復岸工事ニ着手シ
 出来得バクニ新設道路ト河岸ヨリ地際ヲモ漸
 次買収セテ下ノ意アルモ如ク相見ハキ右大考
 考迄ニ係テ及具報ル候具

明治二十八年八月一日

在牛庄

領事 瀨川 浅之進

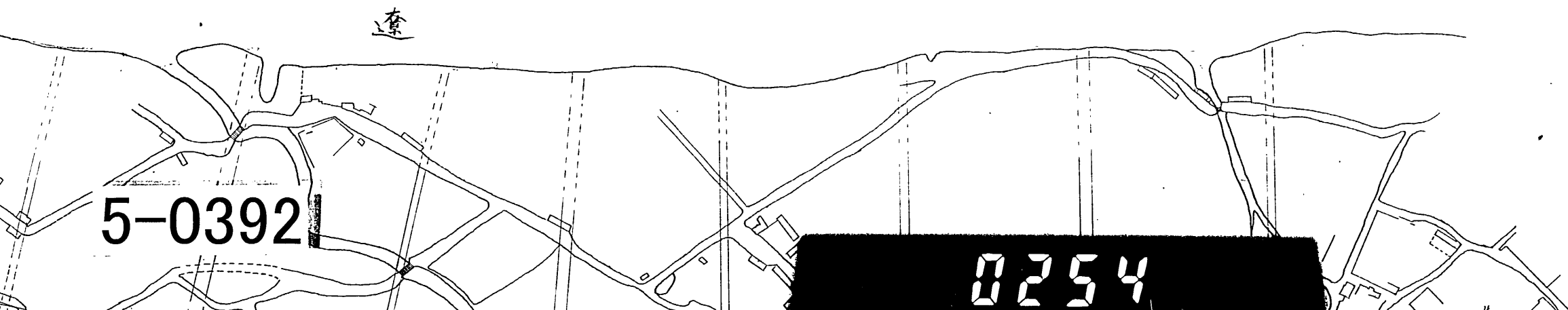


外務大臣 伯爵 桂 太郎 殿

五十七年八月一日

管口牛家屯間道路左右土地等級圖

縮尺五千分の一

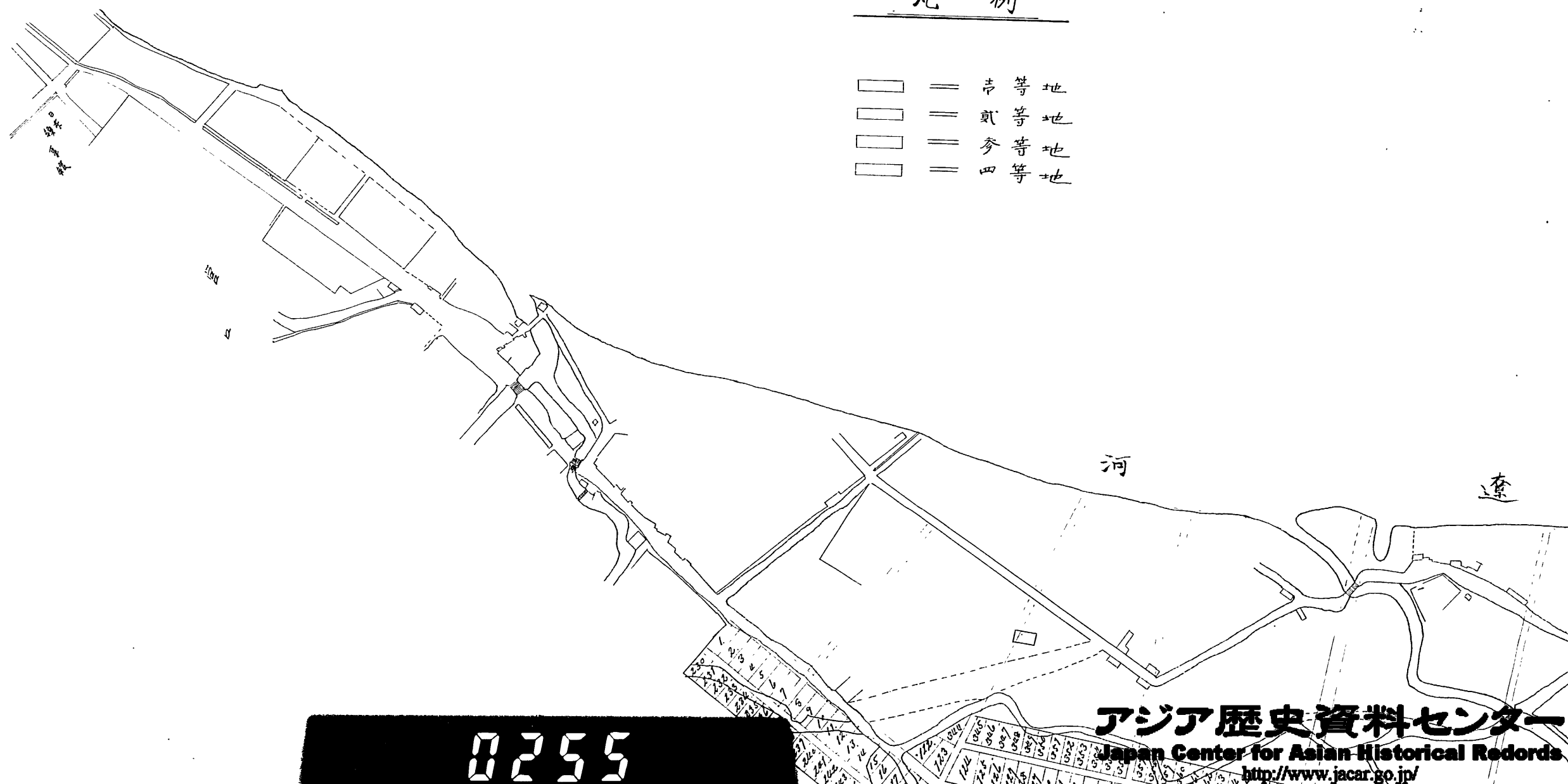


菅口牛家屯片

縮

凡例

- = 一等地
- = 二等地
- = 三等地
- = 四等地

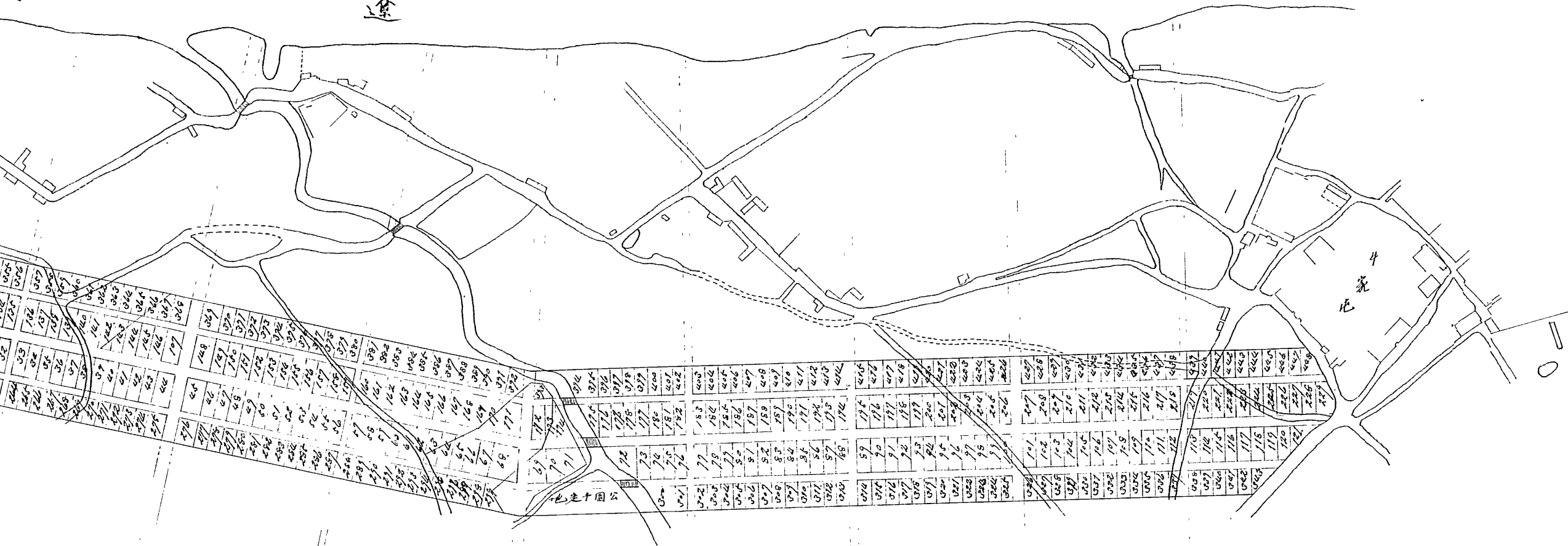


5-0392

0255

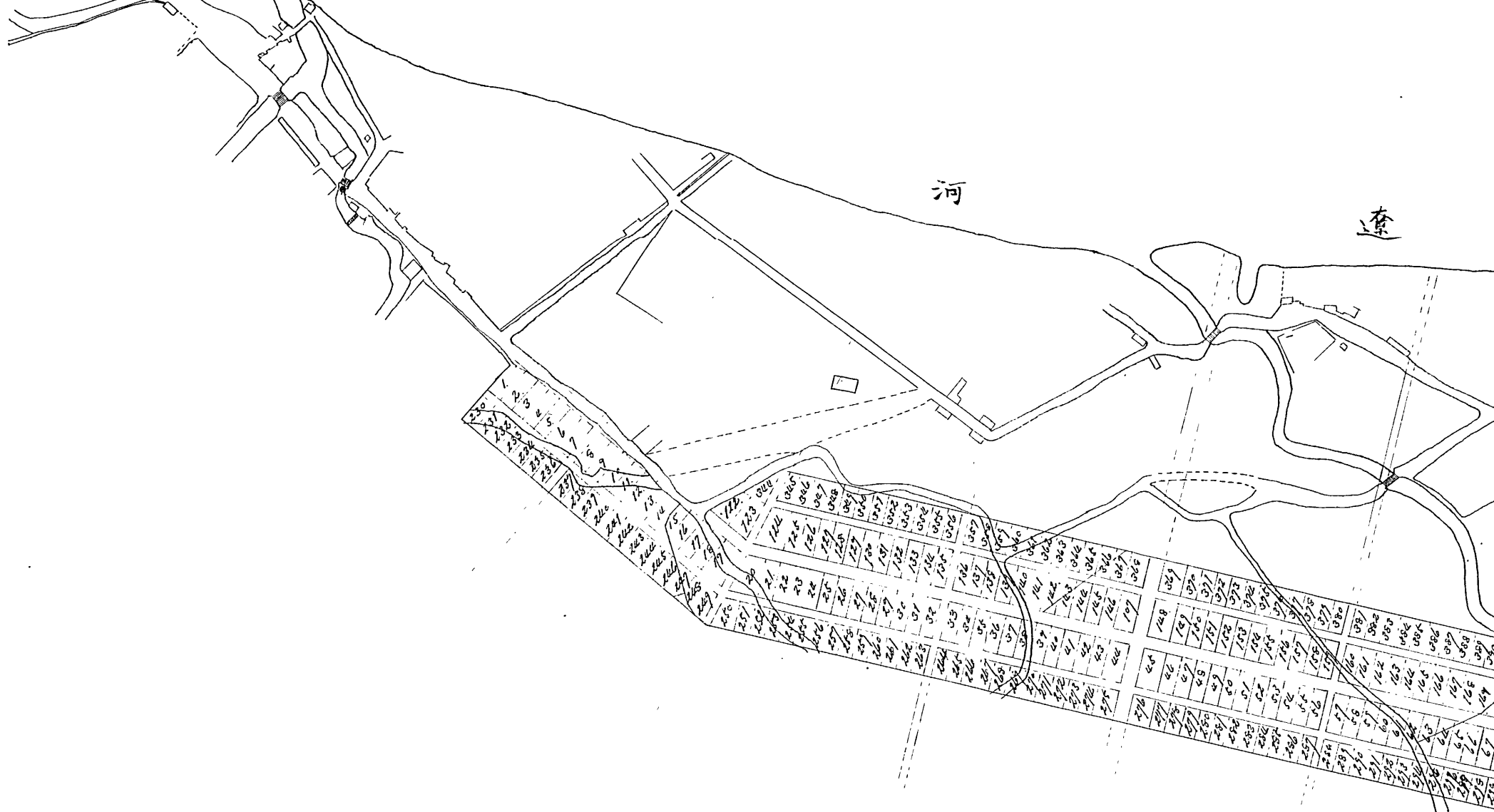
河

遼



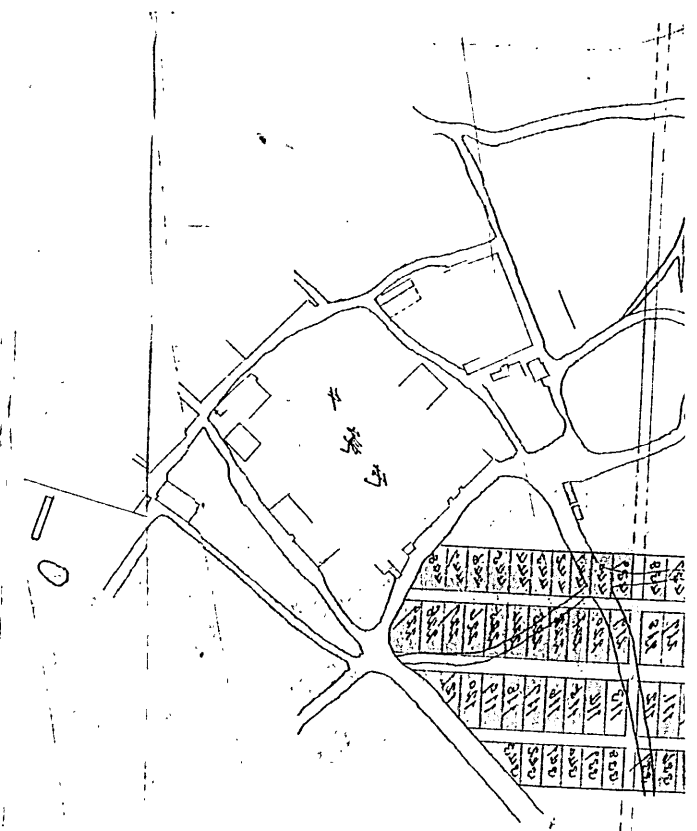
5-0392

0256



5-0392

0257

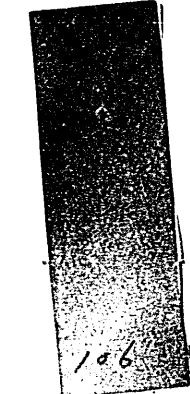


3996. 平 254号
 東急 " " 八時三十分着
 営口三十六年八月二十一日午後三時五十分着

大臣 No. 3996. 平 254号
 次官 柳 外務大臣 在牛莊 瀬川 領事
 分九五号

政務 本邦より婦女ノ渡航スルモノ今尚ホ甚ダ多ク遂
 通商 一一般ノ風俗ヲ壞乱スルヲ恐アルヨリ料理店ヲ
 人事 新ラニ開業スルコトヲ禁止シ又九月一日以後ハ藝
 會計 妓者クハ下碑ノ開業ヲ願出ツル者一切許可
 取調 セザルコトハナセリ故ニ本邦婦女子ニシテ今
 後為地ニ来リ右等ノ業務ヲナサントスル者
 最早之ヲナスノ餘地ナキヲ以テ斯ル種類ノ

左の如く
 (を協定より)



婦^{メノ}女^{メノ}ハ^ハ為^ニ地^ノ方^ノニ^ニ来^ルラザ^ル挿^ス特^ニ注^意ノ要^スル

5-0392

0260

報

在嘗に照会中法より大在否へ大
 一意味、電報に在り
 種々雑多、高野人嘗に、入込に
 双方、誤解を招く、慮ありし、先
 知存、許り得、中露至人、入嘗
 々見合、是れ、多々、好意的、佛名、飲
 事、申込、る、先、エト、ア、し、て、上海、露、清、銀
 行、ハ、在、官、カ、佛、名、領、事、に、対、し、テ、右、ノ
 申込、リ、ナ、セ、シ、ニ、之、日、前、に、自、ラ、答、口、リ、去

十
三
日

受領印
一宗出ノ一
印

沈人

第3門

第269號

明治三十七年七月

陸軍部

出

機密第一号

牛莊港軍政撤去期限ニ関スル件

當牛莊港ハ明治三十三年八月以來露國ノ占領スル所ナリ
 且ニ三十七年七月我軍ノ占領ト同時ニ軍政ヲ實施
 施シ延テ今日ニ至居候處昨年中日露戦争和條
 約モ己ニ締結セラレ次ニ滿洲ニ関スル日清兩國ノ協
 約モ己ニ批准相成リタルニヨリ當地方ノ管理權ヲ
 清國官憲ノ手に引渡スル期ニ最早遠キニテカ
 ルトト相信シ俄然此ノ明治三十七年七月我軍政ノ實
 施ト同時ニ當地駐在ノ我軍政官カ公共ノ便益ヲ
 謀ラシメ為メ施設セル所ノ事業ハ一ニシテ足ラズ
 而モ其事業ノ多クハ今日尙未ダ竣成ニ至ラザル

リカシテ地方ニシテ入ル拒絶云々トハ事
 實ニ至ル程ナリ
 明治三十七年七月一日
 陸軍部

村外務大臣
 内田在清ニ宛テ

カ故之ヲ半途ニシテ中絶スルハ頗ル惜シムヘキ
 一、ミシラ何人モ之カ完成ヲ希望セケルハ無之殊ニ
 該事業ハ概テ當地在留ノ本邦人ニ直接利害
 關係ヲ及ホス以テ在留本邦人ノ多数ハ一日モ永ク
 我軍政ノ施行セラレシムヲ希望シ居ル次第ニ候
 今當地軍政署ニ於テ以上ノ目的ニヨリ着手手
 ノモノ并ニ邦人ノ企圖セル事業ニ對シ保護及
 便宜ヲ與ヘシアルモノヲ掲レバ左ノ通りニ有之候
 一、當口市街并ニ當口及牛家屯間ノ道路改修
 二、當口及牛家屯間新道路ノ兩側ニ在ル地所ノ
 貸下并ニ家屋建築ノ保護
 三、當口及牛家屯間ノ必要ナル河岸ニ於ケル護
 岸工事

四、同上間輕便鐵道ノ敷設
 五、學校病院及俱樂部等ノ設置
 六、本邦人ノ計畫セル電燈架設及水道布設等
 對スル援助

當地軍政署ニ於テ右ノ如キ諸般公共事業ノ
 為ニ費消スル所ノ重ナル財源ハ即チ牛莊鈔関
 收入ノ税金ニシテ該税金ハ一々年約五十万兩内外ノ
 額ニ有之候前記事業ハ概テ香港全体ノ進歩
 發達ヲ謀ル為カニ着手セテ以テ然ルモ全シテ現任
 軍政官タル與倉中佐ノ最モ熱心ノ之カ經營力
 及ルニ居ラレ候付他ノ陸軍官憲ノ意見ニ
 テモ可成ハ同中佐ノ計畫セル事業ヲシテ牛莊
 將來為ニ十分成功セシムル事ハ能ハルカ知ケル

相見得候上文掲載セル諸般ノ事業ハ我軍政
官ノ在任セル間ハ漸次採取リ候事ニ存候得共
若シ一々之ヲ清國官吏ノ手ニ委スルトキハ必
ズ拋棄セラレテ功ヲ一實ニ欠ルハ憾モ可有之
相信候間今日ノ状態ニテハ出来得キ老永
久即チ日露兩國ノ撤兵期間中ハ軍政ヲ繼續
シテ以上ノ事業ヲ完成セシメ候方在留民全般
ノ利益ト相信候

右及具申候 紋具

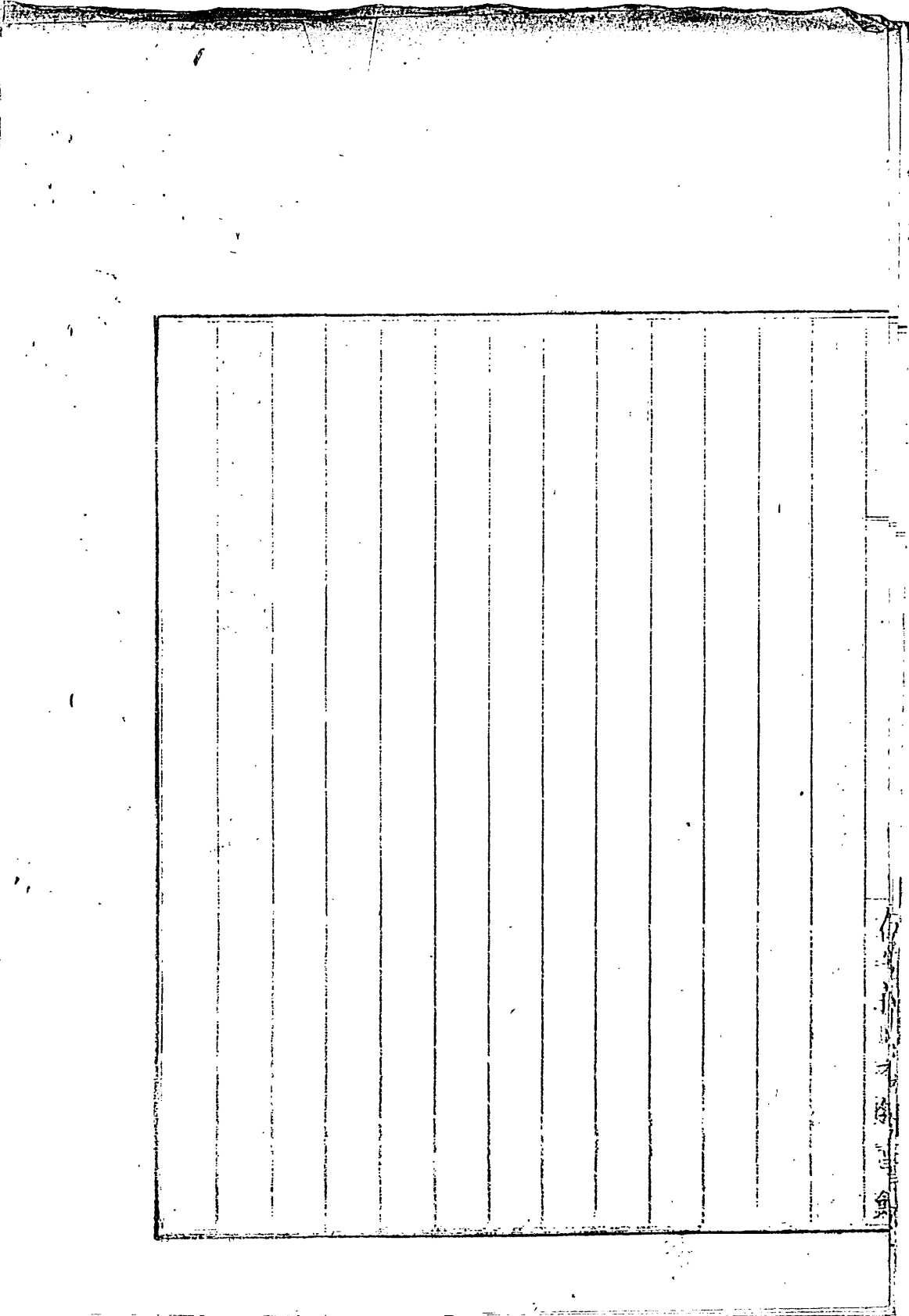
明治三十九年一月二十日

在牛莊

領事 瀨田清之進

外務大臣加藤高明殿

在牛莊山下



寫

明治九年五月十四日

外報

横濱支那館

嘗て於此に余録すべし軍政
ありし職務を係し候

嘗て之に於ては余録すべし軍政
職務を係し候
國を以て相親敷し親友の相成り
に付於ては余録すべし軍政
職務を係し候
嘗て之に於ては余録すべし軍政
職務を係し候
嘗て之に於ては余録すべし軍政
職務を係し候

明治九年五月十四日

也しん減るる者にして是れ其の措
置に及ぶる地は其地は其の實際
の地を以て軍政の軍備
多能く了る業は決して其の
之に及ぶる何事の協同又は
之に及ぶる何事の協同又は
成りしに止りて其の地は其の
政權を以て其の協同又は
之に及ぶる何事の協同又は
不利に感するに可き事被る者

我々此点の事者にして其の
究る費せし者にして其の
一百万に及ぶる地は其の
可なりと云ふ
此の地は其の軍政の軍備
者、現存するに係りて其の
其の業を以て其の協同又は
其の地を以て其の協同又は
其の業を以て其の協同又は
其の地を以て其の協同又は

日清戦争

支那領土等

支那領土等

支那領土等

支那領土等

支那領土等

寫

機密

支那領土等

支那領土等

支那領土等

八心湯方ニ案シテ其の治世七年より一ノ城塞者
 二ノ千倍ノ訓令モ有ラズ其官ノ之ヲ標準ト
 シテ重要ノ事件ニ實シテ軍政官ヲ輔佐シ双
 方互ニ融和親睦シテ各々國事ニ尽スル以テ
 至眼ト致居ル
 領事及軍政官カ曰一地方ニ在リテ曰一日本
 人ノ其ノ權チリハ其モ其目的トスル所相同じ
 カラス即チ軍政官ハ在日邦人ヲシテ其軍
 事ナリ勅ニ対シテ其ヲナシヤン採取締ヲナスモ
 ニシテ領事ハ條約ニ依リ日邦人ノ得ル權利ヲ
 保護スルヲ以テ其名ト致居ル
 日邦人ノ清國ニ在ルニ在リテ其業スルハ條約
 上權利ニ屬スルトモ其モ戰時ニ在リテ軍ヲ以テ勅

二妨害ヲナスルニ對シ相告ヲ取締メテ必要ナルハ
 言フ所ナリ其所ニシテ此點ニ總テ領事モ亦軍
 政官トナリ勅ラ一ニ在リテ其業スルハ
 ナル故ニ其地ニ在日邦人ハ軍政署ニ對シテハ
 居住營業共レテ領事式ニ用ヒ領事ニ對
 シテハ概テ何者式ニ用エテ其例ヲ相成居ル
 口ニ在日邦人ノ官領事時ニ清國ニ在日邦人
 ナラシテ軍政官ニ清國ニ在日邦人ニ對シテハ
 地方官ノ職權ナリ日邦人ノ清國ニ在日邦人
 ハ其所以ノ件ニシテ清國ニ在日邦人ハ其業
 而官ニ在リテ其業スルトモ日邦人ニ對シテ其業
 ハ民事刑事ノ別ナリ一切事務領事ナリ其業
 理判決ニ及ル地境亂治安妨害ノ虞アリテ其業



其ノモ亦領事ヲ裁制シテ其ノ權ヲ軍政署自ラカキ
 分シテ法ヲ以テ治ス
 当地ニ我軍ノ居ル地ノ割ラ多ク其ノ由人
 何トモ支那ノ事ヲ制シテ其ノ地方ヲ治ス
 事ハ軍政署ノ權ニ歸シ其ノ軍政署ノ權
 案事ヲ裁制シテ其ノ權ヲ軍政署自ラカキ
 事ハ軍政署ノ權ニ歸シ其ノ軍政署ノ權
 ナスコトハ相成ル也
 当地軍政官ハ清國人ニ對シテ其ノ權ヲ兩
 權ニ分ク其ノ權ヲ裁制シテ其ノ權ヲ軍政署自ラカキ
 清國人ニ對シテ其ノ權ヲ裁制シテ其ノ權ヲ軍政署自ラカキ

其ノ事業ヲ經營シ居ル其ノ事業ハ軍政官
 以テ其ノ權ヲ裁制シテ其ノ權ヲ軍政署自ラカキ
 清國人ニ對シテ其ノ權ヲ裁制シテ其ノ權ヲ軍政署自ラカキ
 其ノ事業ヲ經營シ居ル其ノ事業ハ軍政官
 以テ其ノ權ヲ裁制シテ其ノ權ヲ軍政署自ラカキ
 清國人ニ對シテ其ノ權ヲ裁制シテ其ノ權ヲ軍政署自ラカキ
 其ノ事業ヲ經營シ居ル其ノ事業ハ軍政官
 以テ其ノ權ヲ裁制シテ其ノ權ヲ軍政署自ラカキ
 清國人ニ對シテ其ノ權ヲ裁制シテ其ノ權ヲ軍政署自ラカキ



據トテ學内總督府ノ存立シテ軍政ノ連續セ
 ラレトモ、勞介ノ日状爲ニ變更シ難カレトシテ
 相續シ共
 大正九年五月五日
 在牛込
 領事所内淺之進

大務大臣後香西園寺公良殿

第3門

附者附意
 第二四号ハ第二部
 七(四)ニ在リ(附者附意)

第二六六號
 一〇九二七
 關東總督府管内居住民取締
 内規草案送付文件

本日送付第二四号ヲ以テ香港ニ於ケル
 諸規則類取揃及市送付置至必商
 本關東總督府管内居住民取締力
 規及野戰鐵道規則ニ市參考爲
 別紙ノ通シ抄寫、上及市送付有同歩
 查收相成度別紙相添此段申達
 美教員
 明治三十九年五月廿一日

右半荘
 領事 瀨川淺之進
 外務省子爵林董殿

第一二六号

關總副政示四一四號

本内規ハ未ル三月十五日ヨリ施行ス
 明治三十九年三月九日

關東總督男爵大島義昌

關東總督府管内居住氏取締内規

第一條 本管内(關東洲、管口、安東縣、新民、及

龍岩浦、ヲ除ク以下同ジ)ニ居住セントスル

本邦人ハ一定ノ營業アルモノニ限ル

第二條 本管内ニ於ケル本邦人、營業者ヲ左ノ二

種ニ分ツ

甲種營業

一兵器彈藥、賣買其他軍事ニ關聯スル事業

二 鉄道、水道、諸運輸業
 三 倉庫業
 四 銀行、金銭、両替、鑛業、農、漁、塩、鑛業、
 牧畜、屠殺業、植林業、
 五 專賣ニ關スル事業
 六 電氣ニ關スル事業
 七 油醬油、酒、製造、製鉄、紡績、等機
 械、設置ヲ要スベキ營業
 八 會社、組合、設立、
 九 新聞、雜誌、發行、
 七種營業
 甲 移以外、營業
 第三條 本管内ニ於テ本邦人、居住營業ヲ許ス

第四條 本管内指定ノ地方ニ居住營業ヲ行ハントスルモ
 本管内總督ノ許可ヲ受リテモトス但シ七種
 營業、新ニ營業セシムル地ヲ管轄スル軍政
 官ニ於テ之ヲ許可スルコトヲ得
 第五條 甲種營業ヲ爲シトスルモ六種ニ規定アルモノ
 ヲ除リ、外左ノ事項ヲ記載シタル領書ニ
 通ニ戸籍簿本、（民政署、居留證明）
（民政署、居留證明）及營業經歷書ヲ添ヘ、（民政署、居留證明）
 末洲ニ居住スルモノニテハ、民政署及同支
 署、其他、現任地ヲ管轄スル軍政署及
 軍務署ニ差出リシムベシ
 六 營業、種類

ニ營業ノ方法

三、營業資本(資本ヲ証明スル材料ヲ添付シ、

四、清國人ト協同スルモノナリテ、其住所、姓名

資力(協同スル資本ニ別記スルモノ)

第六條

一、種營業ヲ許可セラレタルモノニシテ、他ニ轉任シ
或ハ其營業ヲ變更シ又ハ廢業セントスルハ

二、前條ニ準ジ願書ヲ現營業地ノ管轄ス
ル軍政署ニ差出サレハ、但シ戶籍謄本ヲ添付

ニ不及

第七條

一、其第六條ノ願書ヲ受ケタル官衙ニ調査
ノ上許可否ノ意見ヲ具シ、關東總督府ニ

提出スベシ

第八條

一、前條ノ願書ヲ受ケタル官衙ニ調査
ノ上許可否ノ意見ヲ具シ、關東總督府ニ

關東州、房東縣、新氏、及龍岩浦ニ於テモ

前三條ニヨリ關東總督ノ許可ヲ受ケレハ、

第九條

一、種營業ヲ爲サントスルモノハ、前五條ニ準ジ願
書ヲ差出サレハ、但シ直接新營業地ノ軍政官

ニ差出サレハ、

第十條

前條ノ願書ヲ受ケタル官衙ニ新營業地ノ軍
政官ニテヤカハ、調査ノ上許可否ノ意見ヲ附シ

關東總督府若クハ新營業地ノ軍政署ニ送
達スベシ

第十一條

一、種營業ヲ許可セラレタルモノニシテ、他ニ轉任
セントスルハ、願書ヲ現營業地ノ管轄スル

軍政署ヲ經由シテ、新營業地ノ管轄スル

軍政署ニ又營業ヲ變更シ或ハ廢業セ

五十一号日本書局

ントスル場合ニ在リテハ、現營業地ヲ管轄
スル軍政署ニ差出サレハベシ

第十二條 使用人ニ關スルコトハ、總テ在任ノ營業地ヲ

管轄スル軍政署ニ於テ取扱フベシ但シ願書

類ニ在任者ヨリ提出セラルモトス

第十三條 軍政署ハ第九、第十條ノ許可ヲ與ハタルモノニ

シテ居住セシ場合ハ、其原籍氏名ヲ前任

地ヲ管轄スル軍政署、軍務署、民政署

同支署ニ其都度直報スベシ又居住營業

者ニ退去ヲ命ゼシ場合ニ在リテハ、原籍氏

名、年齢、及事故、概要ヲ關東總督府

ニ報告スベシ

第十四條 軍政署ハ其許可シタル七種營業者ニ就テハ

附表第一ニ依リ旬報ヲ以テ又居住氏一覽

表、附表第二ニ依リ月報ヲ以テ報告スベシ

第十五條 居住營業者、許可ヲ得タルモノニテ正當ノ

理由ヨリ其許可、日ヨリニケ月以内ニ居住營

業セザルモノハ無効トス

第十六條 軍政署ハ居住營業者ニ對シテ左ノ諸件ヲ

遵守セシムベシ

一、軍事上ニ關シ見聞セシ事項ハ決シテ漏洩セザルヲ

二、軍事上好害トナルベキ契約ヲ清國人ト締結セザルヲ

三、前二項ノ外總テ軍事上ノ行動ニ妨害トナルベキ行

為ラザルヲ

四、危險品其他治安ヲ害シ又、風俗ヲ壞亂

スル物品ヲ販賣スルヲ

五、土地建物ノ賣買ニ必ズ關東總督ノ許可ヲ受クベシ

第十七條 軍政官ハ本内規ニ基キ關東總督ノ認可ヲ
 經テ且所内居住民取締規則ヲ公布スベシ
 但シ其取締規則ニ百田以下ハ罰銀又ハ當府
 管轄外ニ退去ラ余カル制裁ヲ附スルコトヲ得
 安東縣、新氏、及龍岩浦、ヲ管轄スル軍
 政官又ハ軍務官ハ本内規ニ基キ當該地
 所要ノ取締規則ヲ設ケ關東總督ノ認可
 ヲ得テ公布スベシ

第十八條 本内規ノ行商、爲メニモ準用ス

附 則

一明治三十八年十月九日關總副政方七七号關東總督
 府管内居住民取締規則ヲ廢止ス

二本令施行前各軍政署ニ於テ發布シタル規則ニシテ
 本令ニ抵触サルモノハ依然其効力ヲ保有スルモノトス

附表 第二号

何年何月某軍政署管内某地区住氏一覽表

營業種類別 現在戸数 現在人員 合計 増 減

備考

一 本取締内規發布後總督府に於て許可せられたる營業戸数(二種ヲ除ク)及退去ヲ命ゼシ人員ニ未ダ入ルニ至ラズ
二 本表ニ當ル所著管轄地内居住營業ヲ許可セシ各地毎五分元
三 本表並月十日迄ニ到リ有ルル如ク發送スル

關總副政第四一五號

明治三十九年三月九日

關東總督男爵大島義昌

關東總督府管内居住氏取締内規市三條ニヨリ本邦人ノ居住營業ヲ許スベキ區域左ノ如シ

昌胤以南(關東洲ヲ除ク)ニ於テ東清鐵道及機關車式輕便鐵道線路ノ沿道中重ナル市街村落ニテ守備隊所在地並ニ大東溝、牛莊、義奉、懷仁、城廠、大孤山

正十一年四月五日

府令第壹號

本規則、来ル三月九日より施行ス

明治三十九年三月九日

関東總督府 大島義昌

関東總督府管内旅行取締規則

第一條

拾載以上、本邦人ニシテ本管内ヲ旅行セシトスルモノハ旅行、許可ヲ受ケルヲ要ス

但シ關東洲内ニシテ旅行セシモノハ此限リテラス

第二條

本管内旅行、許可ヲ得ントスルモノハ左ノ事項ヲ記載シテ願書ヲ具地ノ管轄スル軍政

署(軍務署ヲ含ム以下同シ)ニ政署又ハ同支

署ニ提出シ旅行券(雖形参照)ニ附テ受

二五十一頁日本領事館

ノリ

本籍、住所、職業、氏名、年齢、旅行

目的、旅行日数（三十日以内に限る）

第三條

旅用人員又團體ノ旅行ニ依リテ、使用主若

シ團體取締リ連名ヲ以テ出願スルコトヲ

得

第四條

軍政官、民政長官、民政支署長、前二

條ノ出願者中本邦人ニシテ軍事工員他ニ

於テ故障ナシト認めルハ、當府管内ニ限り

旅行ヲ許可シ旅行券ヲ下附ス

第五條

外国人ニシテ當府管内ヲ旅行セシムルモノ

若シハ内外国人ノ間口當府管外ニ旅行

セシムルモノハ、関東總督ノ認可ヲ受ケルコトヲ

要ス但シ願書ニテ二條出願事項ノ外旅行

行先ヲ記載スベシ

第六條

本邦人ニシテ旅行券ヲ下附ラザルモノハ、

願書提出ノ際、每人ニ付テ郵便料トシテ銀

二十錢ヲ納付スベシ但シ郵便料以テ出願スル

時、該年數料、郵便料并（軍事郵便廢止後、

旅行券送附爲メニ該切手ヲ加フル）ヲ以テ代納ス

ルコトヲ得

第七條

旅行者ニ在リテ諸項ヲ遵守スベシ

一、檢査未滿ノモノハ單獨旅行ヲ許サズ

二、旅行券ハ旅行ノ際各自携帶スベシ

三、旅行券ヲ遺失、紛失、セシ者、場合ニ依リテ、

所在地軍政署、民政署、同支署ニ再下附ヲ

附則

領出商船前二下附セラルル官衙ニ其旨ヲ届出

四、旅行者、其旅行中許可シテ營業ヲ為スコトヲ

得ズ

五、旅行券ハ之ヲ他人ニ貸與スルヲ禁ズ

六、旅行券不用トナリタル場合ニ下附ヲ受ケタル

官衙ニ返納スベシ

第八條

本則ハ一、條及ル七、條ニ違反スルモハ二、四

以下ノ罰銀ニ處ス但シ情状ニ依リ軍政

官、民政長官、民政支署長、當府管轄

外ニ是去テ命令セラルコトヲ得

附則

一、明治三十八年十一月五日閣議總副政ニ六、四號閣議東總

督府管内渡航者旅行取締規則ニ之ヲ廢止ス

二、本令施行前旅行ノ許可ヲ受ケタル者ハ其指定時日

間効力ヲ有スルモノトス

明治三十八年十一月五日閣議總副政ニ六、四號閣議東總

旅行(附裏)

本人(支附)分

- 一 本署の有るべき旅費總額を算出するに留意し、旅行の目的を明記する。
- 二 本署の旅行に際しては、旅費の支拂いは、所在地の支署に於て、支署長に申請し、支署長の承認を得る。
- 三 本署の旅行に際しては、支署長は、所在地の支署に於て、支署長の承認を得る。
- 四 本署の旅行に際しては、支署長は、所在地の支署に於て、支署長の承認を得る。
- 五 本署の旅行に際しては、支署長は、所在地の支署に於て、支署長の承認を得る。
- 六 本署の旅行に際しては、支署長は、所在地の支署に於て、支署長の承認を得る。
- 七 本署の旅行に際しては、支署長は、所在地の支署に於て、支署長の承認を得る。

軍政署控分

第一 野戦鉄道輸送手続(改正)

<p>第一 野戦鉄道輸送手続(改正)</p> <p>糧秣(薪炭)等の兵器、被服、服装具、材料、兵員及傷病者郵便物</p>	<p>第二 野戦鉄道輸送手続(改正)</p> <p>ヤウ、少々(百前)其輸送手続は、鐵道提理部ニ請求スルモノトス。而シテ輸送請求、書類若シテ電文ニ其品目數量ヲ明示スルニ要ス。但シ、電文ニ満足スルニテ輸送ニテ、停止場、司令官部、司令部、司令部在ラザル(驛長)ニ輸送請求ヲ送ルコトヲ得</p>	<p>第三 日ハ一定ノ輸送ヲ要ス。官衙ノ為、某列車若シハ列車中ノ一定車數ヲ限リ、該官衙ノ専用</p>
--	--	--

供スルコトアリ其ノ場合ニ於テ輸送ノ種類
數量ヲ日毎録道糧部ニ通報スルコトス
第四 學校同相者官及其送者録道旅行指定軍
用旅券ヲ有スル者ノ其他ニ在テ官衛軍隊ノ
便乘請未書ヲ有スル者ニ限リ停車場ヨリ
官一該官衛在ラセハ駅長以下皆同シハ列車ニ積積
ル場合ニ於テ便乘ヲ請可ス但其請未書
停車場ヨリ官ニ交付ス可キトス

第五 輸送ノ積積及保管ハ輸送ノ屬スル官衛軍隊
ノ責任トス故ニ必要ナル請未書ニ送送ノ官
衛軍隊ノ守領者ヲ附ス但其人負ニ通常
十車毎ニ一名ヲ限リトス十車未滿ノモノニアリテ
亦同シ

第六 輸送ノ積積ニ送送官衛軍隊卸下ハ受領官衛
軍隊ノ擔任トス此等ノ官衛軍隊ノ積下至任者
ヲ定メ積下ノ方指ニ就テ積積又停車場ヨリ官ト
協議セシムルヲ要ス但積積物ニ在テ通常積積
ノ為メニ時間卸下ノ為メ一時間ヲ標準トス
中間停車場ニ於テ列車ノ停車中ニ於テ積
載及卸下ハ如何ニ場合、於テモ送車時該積
之ヲ終レラ西セス

第七 積卸至任者ニ積積停車場ニ於テハ貨車用
掛網及必要ナル雨覆ヲ駅長ヨリ受領シ卸下
停車場、於テハ必之ヲ取纏テ駅長ニ返付ス
第八 貨物ハ此積積ヲナクハ運轉中激動崩落等ナキ
様積積ニ其幅面ハ貨車ノ床面ト同一ニ其ノ

高き如何ナル場合ニ於テモニ床面上ニ之ヲ積ムルコト
ラス

第九

貨物積載ノ方法宜敷ク得ルコト認ムルニキ

其車輛ヲ解放ス又途中ニ於テ墜落シタルコト
貨物アリトモ元列車ニ之レカ及テ、特ニ停車スル

コトナリ又銜道負ニ於テ之ヲ収容スルコトナリ

第十

貨車積載前及新下後貨物ヲ停車場ニ積

堆スルニ方テ、隣車ノ通過ニ危険ヲ與ハサル為メ

少々軌條ヨリ三尺ヲ隔タルヲ要ス其他積込後ノ

位置及積堆法ニ就テハ積込主任者ニ停車場

司令官ノ指示ニ従フニキルトス

第十一

傷病者輸送ニ要スル車輛ハ、裝備及裝備品

ノ保管ニ衛生官衛ノ擔任トス必要ニ際スル

車輛ノ消毒スル亦同旨御之ヲ受施ルニキルトス

第十二

貨物車輿者及傷病者護送者ニ、護送官衛

軍隊ノ軍輿者若シテ護送者ハ、證明書ヲ

有スルヲ要ス

第十三

銜道提理部、輸送途中ノ結着ヲ行フコトナ

シ故、輸送セラルル人員ハ、自カラ辨當ヲ行ハ

ルカ若シ途中ノ兵站司令官部ヲ結着後

クルノ処置ヲ為サレハ、カラス

第十四

本改正手續ハ、二月一日ヨリ実施ス

明治三十八年一月

野戦銜道提理部

録命券十種

野戦鉄道普通運送規程左ノ通り相定メ明治
三十八年十月廿日ヨリ之ヲ施行ス

明治三十八年十月十七日

野戦鉄道管理部長 大澤 田 雄

野戦鉄道普通運送規程

第一條 野戦鉄道線路中時々指定ナルトコトハ、取相

互間、於テ公衆ノ乗車及貨物運送ヲ許可ス

第二條 乗車又ハ貨物運送ヲ為サントスルハ、取相長ニ申

出シテ、料金ヲ交拂、乗車券又ハ貨物運送

状ノ下附ヲ受クベシ

第三條 乗車券ヲ有スル者、列車中ニ座席ノ存在スル

野戦鉄道管理部長 大澤 田 雄

第四條 乘車者有之者、少くとも乗車十分前、
 鉄道係員、就て乗車者に検査を受け、其指
 示に従て乗車スルコトヲ得
 乗車後、若し乗車係員ノ請命アリトキハ
 何時ニテモ乗車者ヲ降下スルコトヲ得
 第五條 乗車者自ら携帶し得ル物、若し離れ座席ヲ
 塞キ又ハ不潔臭気等ヲ爲メ同乗者ニ迷惑ヲ
 及ボスモノハ、客車内ニ持込ムコトヲ得ス
 第六條 貨物託送者ハ、貨物ヲ委託、鉄道係員ニ示シ
 容積重量等ノ検査を受け、其指示に従て一定
 ノ貨車ニ積載スルコトヲ得
 第七條 大ニ容積ヲ有スルモノ若シハ著シキ長さ又ハ

重キヲ有スルモノハ、特ニ既長ノ許可ヲ受ルニ非
 サズ、積載スルコトヲ得ス
 第八條 貴重品、危険物、動物及易損品並ニ三千斤
 以上ノ物並ニ其他輸送上支障アリト認めルモノハ
 輸送ヲ許サズ
 第九條 貨物到達停車場ニ到達シタルトキハ、停車場
 場之側ニ其到達ヲ提示ス、但し荷受人ノ住所
 明瞭ナルトキハ、鉄道ハ之ニ其到達ヲ通知ス
 第十條 荷受人ハ、貨物到達ノ提示を受け、通知を受け
 タル後二十四時間以内ニ貨物運出ヲ指示シ、引
 取りノ手續ヲ爲スルコトヲ得
 荷受人ハ、是時、貨物ノ引取りヲ爲サザルトキハ、
 鉄道ハ之ヲ必要ト認め、措置ヲ爲スルコトヲ得、但し

三
 三
 三

之ヲ爲ス鐵道ニ損傷ヲ及ボシタルモノハ批送

者若シハ荷受人ヲシテ之ヲ賠償セシム

第十七條 列車到着時到着料金貨物料金一別

之ヲ是ム

第十八條 乗車券又ハ貨物運送状下付後ト雖モ軍事

輸送ニ若クハ車輛ノ都合ニ依リ其人負シ若クハ

貨物ノ數量ヲ減シ又ハ全部輸送ヲ中止スルコ

トアルヤ

前項場合ニ於テハ乗車券又ハ貨物運送状ニ

係属シ証印ヲ受ケ之ヲ次回ノ列車ニ使用スル

コトヲ得

第十九條 乗車券ノ下車証係属スル之ヲ交付スル

第二十條 貨物運送状ノ滅失毀損ニ依リ之カ呈示ニ支

障ヲ生シタルトキハ荷受人ハ其權利ヲ証明
シテ貨物引渡シヲ請フ

第二十五條 乗車券ヲ所持スル又ハ車効ノ乗車券ヲ以テ

乗車シ若クハ検査ノ際乗車券ノ呈示ヲ拒ミ

又ハ取集ノ際之ヲ渡サズモハ普通料金

ニ倍ヲ徴收ス

前項ノ場合ニ於テ乗車停車場不明ナルト

キハ其列車ノ出発停車場より料金を計算ス

第二十六條 本規程ニ依リ料金を納付シタルモノハ如何

ナル理由なしニ之ヲ返戻ヲ請求スルコトヲ得ス

第二十七條 本規程ニ依リ輸送スル貨物ノ關シ生シタ

損傷ハ一切其賠償ノ責ニ任ス

普通輸送心得

一 普通輸送規程之條に在りて各駅相互間、
於て公衆乗車並、貨物ヲ輸送ス
大連、南園岩、大房身、全州、三十里堡、
普蘭店、瓦房店、得利寺、萬家山、龍口、
城、蓋平、大石橋、營口、海城、鞍山、遼
陽、煙台、蘇家屯、奉天、仙居、撫順、遼
城子、長崖子、旅順、

一 乗車料金、別紙提票料金を表、通り
一 乗車者、三十四歳未満ノ小兒、無料トシテ四歳
以上十二歳未満、又、半額トス

但算出上格錢未滿ノ端數、總テ格錢ニ切上ケ
一 手荷物、一人、計シ五斤以下ハ無料輸送ス之ヲ

超過スルモノハ手荷物ノ取扱ヲサセ

一 手荷物、規定斤量以内、モトモト容積過大
ナルカ又、二荷物不完全ナルモノハ運送セズ

一 手荷物、旅行具ニ限ルモノトス 俗貴重品、危険
品、易損品等ハ運送セズ

一 手荷物押送者、乗車十分前迄、乗車券ヲ係算ニ示
シ押送ノ手續ヲナスベシ 然ラザレバ次回列車ニテ運
送スルベシ

一 手荷物受渡ニハ台符ヲ使用ス

一 貨物運送料金、通常扱、貸切扱、三種トシテ、
率ニ依リ徴收ス

甲、通常扱料金、百斤以下ハ毎一哩銀五里トシ百斤
未満ノ數量、總テ百斤ニ切上ケ

乙、貸切振料金に對しては毎一哩銀五錢（大石村南
 一線路銀五錢）とし貨車票記帳敷に満ちた貨
 物の搭載を片上原に一事分り徴収す
 丙、最低料金の通常振銀計控銀貸切振料金の内
 トス
 丁、料金計算上控銀未滿ノ端敷ニ總テ控銀
 却上ケ
 一、貨物料金の計算上便宜ノ為メ別紙提示貨
 物哩表ニ因リ徴収ス
 一、貨物托送者ニ托送書必要事項現リ記入シ
 駁長ニ提出ス
 一、

明治三十五年五月末日調査

筆政開始以來ノ事業

菅原筆政著

〇軍政開始以來成効セシ事業	
一	土地買収
二	土地埋築
三	道路
四	護岸
五	棧橋
六	倉庫
七	輕便鐵道
八	學校
九	病院

目次

5-0392

0292

十、宿舎
十一、旅館
十二、公園
十三、電話及電信
十四、郵便局小包部
十五、街燈及道路並木
十六、水底電話
十七、牛家屯停車場乘客待合所及木柵
十八、屠畜場
○着手中ノ事業
一、道路

二、護岸
三、材料購買
四、鑿井
五、鐵道
六、建築
七、煉瓦製造場
八、石碑
○成効セシモノ及着手中ノ事業
一、牛家屯陸軍蒸餾水所
二、小炭汽及支那船
三、電話事業

第一碼頭	支流改修箇所	第二碼頭	學校敷地	官舎前	青堆子新道南側	旅館敷地	全南	緩定門外	計
二、八二九	一、六二八	三、三〇三	一、四四六	四、二九九	九、四四〇	二、一四三	二、九〇六	一、三七一	二、一〇九
〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	九五	二、九七
五、六五八	三、〇四〇	四、六〇六	一、五五八	一、六三〇	三、〇五五	八、五七	九、四〇	五、四八七	二、九七
〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	四、八〇	二、〇〇	一、三三	二、〇〇	九一〇	八〇〇	七、〇〇

青島市工務局工務部

第二碼頭	第三碼頭	第四碼頭	新市街地	計
二、九五七	一、八四六	五、〇八六	一、八四、五二七	三、七、三三三
三三	五〇	三八	三九	三〇
二〇、四六四	一、二五、九八四	三、五、〇〇〇	一、七六、六八一	三、八、三、八、一、八
三〇〇	〇〇〇	〇〇〇	八九六	一、〇六

二、土地埋築
 壹万壹千百貳拾九坪三合五勺
 工費銀貳万九千七百貳拾貳圓七拾貳角四分厘

西營口檢疫所敷地	坪數	工費
五八五〇〇	二、三四〇〇〇	

櫻井時政司命書

三、道路

改修及修繕延長港万七千五拾貳間八分
工費銀四拾港万千三百四拾八圓叁拾錢

修	改	修	修
繕	繕	繕	繕
延長	延長	延長	延長
間	間	間	間
工費	工費	工費	工費
銀	銀	銀	銀
圓	圓	圓	圓
分	分	分	分
錢	錢	錢	錢
一七〇	一〇、一〇〇	二四三、二一一	一八三
五二	六、九五二	一六八、一三七	二一八
八	五	一六八、一三七	二一八
一七〇	一〇、一〇〇	二四三、二一一	一八三
五二	六、九五二	一六八、一三七	二一八
八	五	一六八、一三七	二一八
一七〇	一〇、一〇〇	二四三、二一一	一八三
五二	六、九五二	一六八、一三七	二一八
八	五	一六八、一三七	二一八

四、護岸

延長貳百七拾間
工費銀貳万五千叁拾圓四拾五錢

名	延	工
稱	長	費
間	間	圓
分	分	分
錢	錢	錢
第一碼頭	一三三〇	一三、一一〇
第二碼頭	一四七〇	二、九二三
計	二七〇〇	一六、〇三三
五、棧橋		
棧橋拾五ヶ所		
工費銀參万參千參圓七拾九錢貳厘		
西宮口検査所	一	一、八五一
位	數	費
置		三九〇

西宮口検査所

東管口檢疫所	第一碼頭	第二碼頭	第三碼頭	牛家屯倉庫前	石棧置場	煉瓦煉製造場	小蒸汽碼頭	六倉庫	倉庫三拾棟
一	二	二	四	二	一	一	一		
一、一七七	四、七四四	二、〇九一	一四、三七三	五、九〇六	三七六	五、六二	一、九六〇	三、七〇〇	三、七〇〇
二六〇	一〇〇	四〇〇	五七二	五六〇	二五〇	七〇〇	六〇〇	七九〇	七九〇

工費銀參万四千四百五拾陸圓七拾九角

第一碼頭	第二碼頭	第三碼頭	全	外埠	輕便鐵道	第七輕便鐵道
一七〇〇	一〇〇〇	一四〇〇	一八〇〇	一〇〇〇	一八〇〇	一八〇〇
二、一五一	五、六八二	二、九〇九	九、七九九	五、四四四	三、四四一	三、四四一
五、一〇〇	〇〇〇	五、八〇〇	七、〇〇〇	〇〇〇	七、〇〇〇	七、〇〇〇

ニ至ル間ハ軍用品輸送ノ為メ敷設シタル線路ヲ修繕
シ今所ヲ市街第二市場迄復線シテ約五哩冬
十二鎖ヲ布設シ公共ノ便ニ供セリ其工費ハ銀四千
四百四十五圓八錢ナリ

八、學校

學校ハ元露國ノ使用セシ元神廟附屬家ニ明治三
十七年八月瀧草堂學校ヲ開始シ明治三十八年五
月三義廟附屬家元馬正購買委員既跡ヲ修
築シ之ヲ高業世ニ校ヲ開始シタリ其修築工費銀
三千七百七圓七錢ナリ
其後生徒増加シ校舍ノ狹隘ヲ感シ明治三十八年

九月建坪階下七於五坪四合ニ階七於五坪四合計
百四十七坪八合ノ新築ニ着手シ明治三十九年
一月二十日竣成其工費ハ銀壹万五千六於五四
九於八錢ナリ

九、病院

堂口醫院ハ明治三十八年七月豊清門街ニ借家
療病院ハ明治三十八年七月西堂口元道臺街
内跡避病院ハ阜有門外元露國避病院跡
ヲ明治三十八年四月何レモ修築ニテ開始シタリ
檢疫所ハニヶ所ニテ西堂口ノ分ハ元三義廟前ハ
ラツク百六於五坪ヲ移轉建築シ今年六月迄

室炊事場便所等四坪ヲ増築シ以テ浦
毒所ニ充テ東窓口ノ分ハ於壹坪五合ノ新築
ニシテ各工費ハ左ノ如シ

名称	新築ノ區別	工費
宮口醫院	修築	四〇九六七一〇
療病院	全	七八七三九〇
僻病院	全	八八九七一五〇
西窓口檢疫所	移轉百六十五坪 新築四十二坪	一〇七二八七〇〇
東窓口全	新築十一坪五合	九六〇〇〇〇
計		二〇四六六六一〇
十、宿舍		六一〇

將校官舎ハ元西階國民政廳ヲ憲兵宿舍ハ民政家
ヲ曲子校職員宿舎ハ元神廟附屬家ヲ第一雇員
宿舎ハ三義廟ヲ第二雇員宿舎ハ民家ヲ第
四雇員宿舎ハ角東義莊ヲ右修築シテモニシテ
其工費ハ銀貳萬四百貳拾四円四錢ナリ

七、旅館
旅館ハ新市街ニ明治三十一年十月十五日新築木
ニ着キレ明治三十九年六月十五日竣工ニシテ坪
參百四十壹坪ニシテ其工費ハ銀參万八千四百五拾
一円六錢ナリ

十二公園

各工費計書部工費部

公園ハ明治三十七年十一月軍政署前ニ新設シ其
工費ハ銀五千三百五円拾銭ナリ

十三 電話及電信

電話局ハ元露國ノ電話局ヲ修繕シ通信所ハ
三義廟附偏舎ヲ使用セシメ明治三十八年五月強雨
ノ為ノ倒壊ニタリテ改築シタリ

名称	坪数	工費
電話局	修繕	二、三、三、七、六、〇
通信所	三拾七坪	二、四、八、七、五、〇、〇
計		二、七、二、一、二、六、〇

十四 郵便局小包部

小包郵便ハ元來本局内ニ於テ取扱來リシニ家屋
狹隘ナルト其個數夥多ナル為ノ配達否密下口配
分ニ非常ニ手數ヲ要シ遲キハ着局後ニヶ月ヲ
費ス事アリ市民ノ迷惑甚カラサルニ依リ止ムナク
新築シタリ其建坪四拾坪ニシテ工費ハ銀壹千
百貳拾貳円貳拾銭ナリ

十五 街燈及道路并木

街燈ハ牛家屯街道及第三碼頭附近ニ新設シ
并木ハ牛家屯街道ニ植附ケタリ

名称	員数	工費
街燈	百五拾基	二、四、四、五、〇、〇

營口兵部司命部置改部

并木

七百五拾本

一、一五〇〇〇
三、五七〇〇〇

計

十六水底電話

水底線ハ關外營口駅ニ通スルモノニシテ明治三十
七年十月由本社臺ニ於テ元西階國ノ布設ニ先
「ゲ」ガ此ヲ引揚ゲ牛家屯ニ布設シタルニ碇ノ為メ
切斷セラレ三十八年六月牛家屯上流三家子ニ於
テ遼河ニ前「ゲ」ガ此ヲ修覆洗下ニ對岸ヲ
迂回セシメテ其工費ハ銀六百五拾九円叁拾錢
ナリ
十七牛家屯停車場兼客待合所及木柵

元來牛家屯停車場ニハ待合所及「ゲ」トホト出
入口等ノ設備ナキヲ以テ取締上必要ヲ生
其工費ハ銀五百五拾圓四十八錢五厘ナリ
十八屠畜場

屠畜場ハ明治三十七年十一月民設シタルモ取締上
之ヲ買收シ其後増設及改築ヲナシタリ

名	坪数	工費
牛馬屠殺場	八八〇	二、二一八
豚屠殺場	九八〇	五、〇〇四
計	一八六〇	七、二三二

農林部直轄

着手ノ事業

第一道路	新道ハ牛家北街道及新市街修築ハ營口市	街ニシテ之レニ附帯スル下水溝ナリ	延長	工費
	新道	三、八七五	十一月十五日	九、三二二
修築	下水溝	三、六四三	十月十五日	二、八〇五
	下水溝	一、九五〇	十一月十五日	三、九四四
計				六、二二五
第二護岸				九、八〇〇
第三碼頭				二、二八八
				六〇〇

營口市占領ノ事務直支那

牛家屯	四〇〇〇	十月	九一六五五〇〇〇
計	六五五〇	三十日	二四、五三七六〇〇

三、材料購買

護岸及道路下水工車用材料トレテ購買ノ
契約ヲオシタルモノ銀參拾八萬四千貳百六拾四圓九
拾錢ナリ

四、鑿水井

鑿水井ハ元來ノ方法ニテハ到底飲用ニ適スル良水
ヲ得ル不可能ナルヲ以テ專賣特許森林株式ニヨリ
約三千呎ヲ貳個所穿鑿スル計畫ニレテ其工費
ハ約五万円ナリ

五、鉄道

鉄道ハ前頭護岸及道路下水用材料ノ運搬費
ヲ在來ノ方法ニヨリ計畫スルハ實ニ巨額トナリ材料重
大石橋ヨリ出ス石材ニシテ牛家屯迄ハ汽車ノ使
リト全所ヨリ工場ノ輕便鉄道ヲ使用セシモ費用
多額ヲ要スルニシテ工車ノ進捗ヲ妨クルヲ以テ一
時線路ノ延長ヲ提理部ニ交渉シタルニ軌條ナキ
面谷ニ接シ止クナリ軌條枕木ヲ購入シ牛家屯駅構内
一哩普堆子新市街ニ達スル貳哩ノ本線ヲ延長
布設スル計畫ニテ其工費尤ノ如シ

名 額 工 費

計	電話倉庫	憲兵官舎所	俱樂部	病院	名稱	六建築	計	靴條	枕水	布設費
						坪		三	一	三
						坪敷		哩	本	哩
						工費				
九三九六七	六五〇	一四四九	一九〇〇	七二六八	〇六〇		四八〇九〇	一一〇〇〇	一一〇〇〇	二五五〇〇
八八〇	〇〇	八二〇	〇〇	〇〇	〇〇		〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇

七、煉瓦製造場

煉瓦ハ當地方ニ於テ製造業者甚キ為ニ需用供給ノ權衡ヲ失シ其價格暴騰シ工事上多額費用ヲ要スルヲ以テ徑済上新式電ヲ築造ニ着手シ其工費ハ銀四万九千六百拾円三拾五銭ナリ

八、石碑

牛家屯ニ於テ戦死亦ハ病歿シタル軍人忠魂碑ヲ建設ニ着手シ其工費銀壹千參百拾壹円九拾六銭ナリ

成効セシモノ及着手中ノ事業
 一、牛原屯陸軍蒸餾水所
 牛原屯榨車場構内ニ位置セル露田、残置建物ニシテ
 右領後若干修理ノ後我軍衛軍隊ノ爲メ飲料水
 ノ供給リヤシ本年三月以迄、昼夜運搬轉送一日
 約六十石ヲ製作セリ、且下止在ノ傭人、以テ一日約三噸ノ
 石炭ヲ供給シ、約二十石ヲ製出、諸官衛軍隊其他有力
 ノ我軍紳商等、西税關、區度下ニテ給水平及給水以
 ヤシク、以テ運搬セシメ、ワリ
 二、小蓬瀛及支那船
 港口ニ飲後當時、小蓬瀛ニ腹捕獲セシ毛向港内ノ交

香川三島司本部文書

通商以外他海賊討伐等、爲不足之感、三艘を購
 入、その他将来至原上必要、支那ジャンクを購入セ
 り其数量左、如シ

船名	購入年月日	代	價	柄	要
第一木津丸	二十七年八月		四三、四六九六。	日本商人より購入	
日吉丸	二十八年六月		五〇、〇〇〇。	月	
飛元丸	二十八年八月		一、〇〇〇。	月	
ハイロツ丸					函獲(船名不明)
吉林丸					日

計五艘 式高四寸二百九十百九拾六錢
 以上はハイロツ丸三函獲、松尾砲、振付、海賊討伐に使用ス

支那ジャンク	購入年月日	代	價	柄	要
二四二	二十七年七月		六五、一三七、四三。	鐵板、河、道、ヲ、購入	
二五、	引及			赤陽鐵道、部、ヨリ	
九三、	引及			奉天、守備隊、ヨリ、伴、安	
七三、	二十八年九月		二一〇、〇〇〇。	一隻、水、船、ヲ、回、庄、迄、ハ、送、付、脱	
四、	占、領、時			二隻、ハ、小、サ、送、付、持、用	函獲

計参百六拾七隻、金六萬七千二百三十七圓四十三錢

三、電話事業
 明治二十七年八月、在、飲、セ、シ、四、法、國、電、話、社、有、限、公、司、人、件、交、換、方、
 一、台、ヲ、交、換、局、ニ、完、結、ス、加、入、者、一〇、二、名、(一、名、ハ、月、金、五、圓、五、
 共、職、員、八、人、ヲ、以、テ、之、ニ、充、ツ

管口長官司令部秘書

監督一、交換手^{陸軍}支那人^二 工夫支那人^二
 三十八年八月左、通入増加ス
 百人附交換器式台
 電話器其他材料百人分 八千七百五十九七銭
 電柱六十本、板丸太百本 七百六十二圓五十銭
 露西亞式昔式交換器、徹去し右新交換器ノ排道十二
 月一増設工事完成ス
 新加入者 六十一名
 交換手三名増備ス
 三十九年一月半、陸軍省トテ陸軍電信隊ノ監督
 兼、小遣ニ改メ陸軍電信隊ノ監督

必要ナル工夫配属ス
 本年七月半家宅決定門街市市場各市街鉄道局也
 二公衆電話所ヲ設置し四月一ヨリ開始ス
 六月加入職員式百名
 職員左ノ如シ
 所長 陸軍電信技手一、事務員 一、
 交換手 日本人 七、工夫 日本人 七、
 更増設ノ爲、本年三月左、通入し本月上旬刊着
 又
 電話器一切百名分(陸軍省) 一、三、三九、六六、五、
 目下以上、増設工事中ニシテ来ル月ニハ、設完

全に見じたり

既設二〇〇名
日本 一五二
外國人 二七一
（二七）
在手中、モ、五十八名

營口農事學校沿革及現在概況

營口農事學校沿革及現在概況

營口及金滿州、刺奈ヲ刺シ、海員、農家ヲ養成シ、將來、日清、俄國、進歩ヲ計ル、以テ目的トシ、從來、露國ノ經營、ハ、俄、華、文學、堂ノ、校舎ヲ、收容、増、築、シ、明治、三十七年、九月、開、校、ス、

學生

學生ハ、多ク、家事、又ハ、業務、ノ、都合、上、入、退、學、頻、數、ノ、結果、生徒、ヲ、シテ、之、分、成果、ヲ、見、ル、能、ハ、サル、ハ、且、取、モ、遺憾、ト、ス、ル、處、ナル、モ、一、般、在、學、中、ハ、熱、心、勉、勵、シ、結果、概、シテ、良好、ナリ、

其、ま、衣食、及、年、齡、ノ、差、異、大、著、シ、キ、ヲ、以、テ、同、一、ノ、程度、ヨリ、教授、ス、ル、事、甚、カ、困難、ナリ、現、在、學生、及、入、退、學、生、教、員、ノ、年、齡、別、ノ、如、シ、

現在総教 八八 入学生総数 一三二 退学生総数 四四

内第一学年 三〇

第二学年 二五

夜学班 三三

本科入学生 八〇

夜学班 五二

二五

一九

生徒年齢表

十二歳以上 十五歳以上	十六歳以上 十八歳以上	十九歳以上 平均年齢
四	九	三
六	三	二〇
六	三	二
六	三	二

教授科目

修身 漢文 美術 珠算 国語 理科 商業 地理 商業 歴史 算学
 商業書信 簿記 商業 簿記 日本 法 体操

現在ニアリテハ在り如ク 科目ヲ定メテト 毎一級ノ 素養ニ合シキヲ以テ 専ラ
 普通ニ通学ニ重キキ 但シキ 事理ノ 明通ヲ 待テ 漸ク 物理 初ニ 商業 法 規 等
 ヲ 講ニセシメントス

日本人夜学部

管内ニ在リテ 後邦人ノ 渡来スルモノ 日々 多キヲ 加ヘテ 爲メニ 夜間 商業
 務ノ 參觀 読学 及ビ 商業 上 中 近 ノ 學術 ヲ 授ケ 商業 ノ 發達 ヲ 計ル
 爲メ 本 園 補習 學校ニ 依リ 同 部 ヲ 開設セリ 其 課程 自 商業 上ニ 関
 スル 諸 學 科 ヲ 定メ 毎 日 下 都 會 上 友 邦 校 ノ ミニ 教授 せり 而シテ
 該 部 開 校 以 来 十 七 月 入 學 スルモノ 二百 名ニ 上リ

山口瀛華堂学院

皇軍ノ空ロヲ占領スルヤ露國ノ万端ノ事業ハ廢
滅シ我軍政下ニ諸般ノ秩序整頓スルニ及ヒ市民
ハ漸ク日本治ノ必要ヲ感シ日語學校ノ設立ヲ
希フコト切リ依テ元俄漢文學ヲ改メ瀛
華堂学院ヲ起シ十五才以上三十才以下ノ學
生ヲ募集シ明治三十七年九月今ツ開校ノ儀
ヒニ至レリ

學生

一開校ハ未學徒ノ状態、一時ノ好奇心又ハ或
手段ノ爲メ入學セルモノナキニモラスト後ハ校

寫此ト者ニシテ其成績良好ナリ

其生徒數、九月十九日ニ至ル間七十名ニ及ヘリ
ト雖ル本年五月五十名ニ減シ目下五十九名ト
ナレリ而シテ生徒學力、差異ニヨリ同一程度ヲ
以テ教授スル事困難ナルヲ以テ其程度ニヨリ本
年一月ヨリ甲乙二班(甲班二十名 乙班三十名)ニ分テ教授シツ、
アリ

三、生徒年齢別

甲班		乙班	
生徒數	年齢	生徒數	年齢
二〇	自七才 至十二才	三九	自十才 至十八才
	平均 年齢 十六才		平均 年齢 十六才

教授課目

甲班 普通學中學程度ニ日本語ヲ加ヘタルモノ
乙班 日本語及小學程度普通學全般